

ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフの軌跡* ウズベキスタン・イスラームにおける非党派主義と中道主義の萌芽過程

和 崎 聖 日

The Path of Muhammad Sodiq Muhammad Yusuf The Process of Establishing Non-partisanship and *wasafīya* on Islam in Uzbekistan

WAZAKI, Seika

This paper examines the activity and process of the foundation of thought of Muhammad Sodiq Muhammad Yusuf, an Uzbekistani considered to be the foremost Islamic scholar in Central Asia after the dissolution of the Soviet Union. He was elected as the fourth muftī of the Spiritual Administration of the Muslims of Central Asia and Kazakhstan, as well as a deputy to the Supreme Soviet of the USSR in 1989. In addition, he was elected as the first *muftī* of the Muslim Board of Uzbekistan. He thinks his leaning towards *wasafīya* originated in the religious education he received from his father in childhood and a 1970s lecture at an Islamic institute in Tashkent by *Imām al-Bukhārī*, and developed during his studies in Libya. During his 1993–2000 semi-exile, mainly in Libya, it is presumed that he established his position and credibility in Arab countries with the help of Mu‘ammar al-Qadhafī and the Minister of Education, Muḥammad Aḥmad Sharīf. Global terror by Islamic extremists and the 1992–1997 Tajikistani Civil War certainly reaffirmed the importance of Muhammad Sodiq’s *wasafīya* and his opposition to Islamic political movements and partisanship. His thoughts resonated with the thoughts of Ramaḍān al-Būṭī, who advocated non-partisanship in Islam, and Yūsuf al-Qaraḍāwī, who urged *wasafīya*. After returning to Uzbekistan in 2000, Muhammad Sodiq refused to be a government-regulated scholar, while working to maintain good relations with the government. In summary, it is highly likely that Muhammad Sodiq’s thought will be placed in the lineage of the reformist thought of the four Sunni orthodox law schools, along with Ramaḍān al-Būṭī, who shows an understanding of the moderates of the Muslim Brotherhood, and Yūsuf al-Qaraḍāwī, who shows political solidarity

Keywords: Muhammad Sodiq Muhammad Yusuf, Uzbekistan, Islam, non-partisanship, *wasafīya*

キーワード: ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフ, ウズベキスタン, イスラーム, 非党派主義, 中道主義

* 本稿は平成 30 年度科学研究費補助金・若手研究 18K12604 による研究成果の一部である。



with the moderates of the Muslim Brotherhood. His thoughts are considered to be the mainstream Islamic trend in contemporary Uzbekistan, where it is overwhelmingly supported by both the government and the people, although not unanimously.

- | | |
|--|---|
| <p>I. はじめに</p> <p>1. 目的と背景</p> <p>2. 中道主義</p> <p>3. 先行研究</p> <p>II. 思想の原点としての家族文化</p> <p>1. 両親と親戚</p> <p>2. 幼少期における宗教教育 (1952-1970)</p> <p>III. ソヴィエト体制下での中道主義との出会い</p> <p>1. 国内での学徒期 (1970-1975)</p> <p>2. リビア留学期 (1976-1980)</p> <p>IV. 中道主義の普及の困難</p> <p>1. 留学後からペレストロイカ改革中後期</p> | <p>まで (1980-1989)</p> <p>2. 宗務局長時代 (1989-1993)</p> <p>V. 半亡命生活 (1993-2000) の中での交流と思索</p> <p>1. 著述活動と知的権威たちとの交流</p> <p>2. タジキスタン内戦をめぐる内省</p> <p>3. ジハード論と中道主義</p> <p>VI. 非党派主義と中道主義の萌芽</p> <p>1. 帰国後 (2000-2015) の国内外の状況</p> <p>2. 非党派主義の普及の試み</p> <p>3. 中道主義の普及の試み</p> <p>VII. おわりに</p> |
|--|---|

I. はじめに

1. 目的と背景

本稿では、ソ連解体後の中央アジアで最も傑出したイスラーム学者と数えられるウズベキスタン出身のムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフ (Muhammad Sodiq Muhammad Yusuf, 1952-2015) を取り上げる。彼の出自は、クルアーンと預言者ムハンマドのスンナの墨守を特徴とすることで一般に知られるナクシュバンディー・ムジャッディディーヤの導師に連なると言われる。ムハンマド＝サーディクは、弱冠 37 歳にして中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局の第 4 代ムフティー (*mufti*¹⁾: 宗務局長) (在任期間 1989-1991), ならびにソヴィエト連

邦最高会議の人民代議員に選出された。1991 年には、ウズベキスタン・ムスリム宗務局の初代ムフティー (在任期間 1991-1993) にも選出された。彼の信奉者の広がりには、ウズベキスタンだけでなく、カザフスタン南部やタジキスタン北部などの近隣諸国、ロシアにまでおよぶ [Olcott 2007b: 5; 2012: 107]²⁾。

彼の晩年の思想に認められる特徴は、スンナ派イスラームの知と団結力を衰退させるイスラームの政治運動と党派化の拒否 (以下、「非党派主義」と記す)、ならびに中道主義 (*wasatīya*: 中庸思想) の 2 点にあると考えられる。本稿では、ムハンマド＝サーディクの家族文化と活動の軌跡を考察することにより、彼の晩年における思想をこのように特徴づけることの妥当性を検討し、それが社会

1) 本稿では、アラビア語をラテン文字に転写する場合、『岩波イスラーム辞典』[大塚ほか 2002] に準拠し、斜体で記す。ウズベク語とロシア語をラテン文字に転写する場合には、『中央ユーラシアを知る事典』[小松ほか 2005] に準拠し、前者は立体で、後者は立体に下線を引いて記す。なお、人名と地名は立体で記した。

2) カザフスタン南部やタジキスタン北部、クルグズ西部は、ウズベク人の居住率が高いことで知られる。

主義圏でのイスラーム学者らとの交流を契機に強化されたことを明らかにする。本稿の最後には、彼の思想を現代イスラーム世界の知的権威たちの思想潮流に位置づける作業も行う。ただし、ムハンマド＝サーディクの思想の本格的な分析は大きなテーマであり、別途の検討を要するものである。それゆえ、本稿では彼の思想が形成されていくその背景と過程の分析に重点を置くことにしたい。

2015年3月、ムハンマド＝サーディクは62歳にして亡くなった。しかし、彼の思想はいまもウズベキスタンの多くのムスリム民衆から絶大な支持を受けている。彼の弟子であった宗務局のムッラー (*mullā*: イスラーム諸学に通曉した知識人らの総称) たちも、各種のメディア媒体や金曜説教などの場で師の思想を人々に伝え続けている。一方、ウズベキスタンの第2代大統領シャウカト・ミルズィヨエフ (Shavkat Mirziyoev, 1957-) (在任期間 2016.12-) は2018年2月、ムハンマド＝サーディクの思想を支持する立場を表明した³⁾。これにより、彼の思想は公式に権威化された。

ムハンマド＝サーディクの思想の特徴を検討することは、現代ウズベキスタンのイスラーム潮流の本流を体制と民衆の双方の側から明らかにすることにつながる。このことの意義は、ソ連後期から独立を経て現在に至るまでの激動の時代におけるウズベキスタン・イスラームの知のあり方の1つ

を浮き彫りにすることにある。なお、本稿では、近現代のイスラーム世界における人名や書名がたびたび言及されるが、それらについて本文中で補足、注記するさい、主に『岩波イスラーム辞典』、『中央ユーラシアを知る事典』、『ウズベキスタンのウラマーたち』[Yo‘ldoshxo‘jaev va Qayumova 2015]、ミーリ・アラブ・マドラサのウェブサイト (<http://www.mirarabmadrasa.uz/oz/> [2020年9月1日閲覧]) を参照した⁴⁾。

2. 中道主義

中道主義と訳される「ワサティーヤ」という言葉は、アラビア語で「中央」を意味する「ワサト」(*wasat*) の形容詞「ワサティー」(*wasatī*) から派生語として抽象名詞化したものである [黒田 2019: 47]。「ワサト」の語は、たとえばクルアーン第2章 143 節に「かくてわれらは汝らを中正 [ワサト: 真中, 中道, 中庸] の民となした」⁵⁾ とあるように、クルアーンで言及される。この語から派生した中道主義の概念は、20世紀半ばにエジプトのアズハル学院のイスラーム学者が用いはじめた後、この概念に立脚した「イスラーム的中道派潮流」(*tayyār al-wasatīya al-Islāmiya*, または単に *al-wasatīya*)。以下、「中道主義」と記す) として、エジプト出身のユースフ・カラダーウィー (Yūsuf al-Qaradāwī, 1926-) ⁶⁾ の貢献により確立された [黒田 2019: 52]。彼はアズハル学院のハ

-
- 3) 2018年2月12日にYouTubeに投稿された動画「大統領 ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフについて」(<https://www.youtube.com/watch?v=UZaHZho8WL4&t=67s> [2020年9月7日閲覧]) を参照した。
- 4) 人名や書名について、本稿で取り上げられるもののうち、本文中で補足していない、または注釈をつけていない箇所もあるが、それらについては読者に委ねたい。書名の表記については、原則的に二重鉤括弧内に邦訳だけを記した。ただし、一部の書名については、筆者の判断により原語も表記し、そのさいにはすべて斜体で記すことにした。
- 5) ここでのクルアーンの章句の翻訳は [井筒 1957; 中田 2014; 黒田 2019: 47; 小杉 2006: 303; 塩崎 2012: 12-13] を参照した。本稿での引用文中における亀甲括弧内の記述は筆者による補足、ならびに点線は省略を示す。
- 6) カラダーウィーは、政権のムスリム同胞団への弾圧によりエジプトでの活動を長らく禁じられていたため、アズハル学院の海外部門に職を求め、1961年に (イギリス保護下の) カタルに移住した [黒田 2019: 52]。

ナフィー派の学者であると同時に、ムスリム同胞団と関係を持つ稀有な存在として知られる。こうした背景を持つカラダーウィーと、同じくエジプト出身の学者ムハンマド・ガザーリー (Muḥammad al-Ghazālī, 1917–1996) の主導により、中道主義は国際的に広められた [黒田 2019: 55, 58]。

カラダーウィーはオスマン帝国解体の時代を生きたイスラーム改革主義者ラシード・リダー (Muḥammad Rashīd Riḍā, 1865–1935) からマナール (灯台) 派⁷⁾ が「中道のイスラーム改革派」と定式化し、ハサン・バンナー (Ḥasan al-Bannā, 1906–1949) が「ムスリム同胞団」として大衆化した中道主義を現代に継承する存在である⁸⁾。彼らは現在、13世紀以降にハナフィー派を中心に広がったタクリード (*taqlīd*: 追従) の伝統、すなわち先達によるイジュティハード (*ijtihād*: 学的解釈) の結論 (法規定) に従うという慣例を自明とする伝統墨守派 (以下、「伝統派」と記す) とも、1970–1980年代に同胞団内部で伸張したクトゥブ主義やその他の過激な急進派とも決別し、またイスラーム復興を望まない世俗主義に対抗しながら、イスラームの中道主義を牽引している。クトゥブ主義とは、エジプトの同胞団のイデオログであったサイイド・クトゥブ (Saʿīd Quṭb, 1906–1966) にちなみ、現体制と社会全体の否定を意味するタクフィール (*takfīr*: 不信仰断罪)、ならびに反体制武装闘争としてのジハード (*jihād*) 論に特徴づけられる思想傾向である。

現代の中道主義は、イスラーム内部の伝統派と急進派、ならびに外部の世俗主義と反イスラーム派の中庸を行き、信仰や社会、政治、立法など多様な分野を視野に入れた包括的な

理解に即した現代的な法解釈によってイスラーム世界の復興を試みる思想潮流を指す。この中道主義によって社会におけるイスラームの指導権は回復される、とカラダーウィーは唱く。その実現には、現代社会をイスラームに導きうる先導的勢力の形成、それを支持する民衆のイスラーム的世論の形成、そしてイスラーム世界の存在を受容する国際的環境の整備の3点が最低限必要だとされる。

カラダーウィーに特徴的なイスラーム法解釈の方法論は、以下の4点からなるとされる [塩崎 2012: 12]。第1に、法学派のタクリードの伝統に拠らず、クルアーンとハディースを直接典拠とするサラフィー (*al-Salafī*: 預言者ムハンマド後の3世代への回帰) 的方法である。これはイブン・タイミーヤ (Ibn Taymīya, 1258–1328) が唱え、ムハンマド・ブン・アブドゥルワッハブ (Muḥammad ibn ʿAbd al-Wahhāb, 1703–1792)、アフガーニー、アブドゥ、リダーらにより継承されてきた。第2に、異なる法学派の規定を参照して直面する状況に最適な規定を採用する方法、すなわちタルフィーク (*tafīq*) である。第3に、サハーバ (*al-Ṣahāba*: 預言者ムハンマドと接したことのある教友) の見解を典拠とする方法である。これら第2と第3の方法は、アブドゥヤリダー、18世紀南アジアのシャー・ワリーウッラー (Shāh Wali Allāh al-Dihlawī, 1703–1762) が用い、後代の学者らにより発展させられてきた。第4に、シャリーアの目的は何か、という根本命題にとって重要だとされるマサラハ (*maṣlaḥa*: 公共の利益) と中道主義の概念を法判断の基準として、時代状況に適した法解釈を行う方法である。マサラハをその基準とする方法は

7) マナール派とはリダーが創刊した雑誌『マナール』に拠った人々を指す [小杉 2006: 223]。彼は19世紀後半の西洋列強の脅威を前に、近代西洋文明 (科学) の吸収や理性の重視などによるムスリム社会の復活を説いたイスラーム改革思想の先駆者ジャマールッディーン・アフガーニー (Jamāl al-Dīn al-Afghānī, 1838/9–1897) と弟子のムハンマド・アブドゥ (Muḥammad ʿAbduh, 1849–1905) がパリで創刊した雑誌『固き絆』に衝撃を受け、この使命を継承すべく、同誌を創刊した [小杉 2006: 200, 217–219, 223]。

8) 以下、この段落と次の段落について特に言及しない限り、[小杉 2006: 231, 292–304] を参照した。

近代以降のイスラーム世界で用いられてきたが、中道主義をその基準とする方法はカラダーウィーに固有なものとする。

加えて、カラダーウィーが提唱した特に重要な概念として、現代的な問題群に集団で対処し、イスラーム法解釈を行う「集団的イジュティハード」(*al-ijtihād al-jamā'ī*)がある〔黒田 2019: 54〕。この実践に向けた動きの一環として、彼は2004年にムスリム・ウラマー世界連盟を発足させたとされる〔黒田 2019: 54〕。また、中道主義に特徴的な論法が特定の2つの対立軸(伝統派と急進派など)を設定し、両者の均衡をとる点にあることも指摘されている〔黒田 2019: 53〕。

3. 先行研究

ムハンマド＝サーディクの活動と思想形成の過程を明らかにしようとする先行研究は、管見の限り非常に少ない。その例外に、一次資料として彼の発言を分析したM・オルコットの研究〔Olcott 2007a; 2007b; 2012: 107-134〕がある。彼女の研究は、この分野の金字塔と言える。しかし、彼女による研究には中道主義への言及がなく、彼の家族文化と学徒期における学びが彼の思想形成に与えた影響についての考察もない。また、リビアを中心とした半亡命生活期(1993-2000)についての言及も乏しい。

本稿では、以下の資料を取り上げ、ムハンマド＝サーディクの活動と思想の軌跡を再検討し、オルコットの研究を前進させることを試みる。一次資料は、主に以下の3つである。第1に、「ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフ ジハードに関する質疑」と

題された説教(1999年。出典は後述)である。この説教は、彼が自らの中道主義を半亡命生活期にはすでに確立させていたことを示すものである。第2に、シリアのシャーフイー派の学者ラマダーン・ブーティー(Muhammad Sa'īd Ramaḍān al-Būṭī, 1929-2013)著の『非学派主義：シャリーアを脅かす最も危険な逸脱』のウズベク語訳書に付されたムハンマド＝サーディクによる「序言」と「結語」(共に2012年4月脱稿)〔MYSMS 2018a, 2018b〕である。これらは、両者の交流の軌跡とムハンマド＝サーディクへのブーティーの思想的影響を明らかにする。第3に、中道主義をウズベキスタンで初めて本格的に紹介した著作『中道主義：人生の道』〔MYSMS 2016〕である。この「序言」では、ムハンマド＝サーディクの家族文化と思想的原点、1970年代の中道主義への傾倒の過程などが語られる。彼の中道主義の独自性を考えるには、この書の詳しい検討が必須だが、その作業は前述した理由から別稿に譲る。

一次資料に準じる資料としては、ムハンマド＝サーディクの実弟ムハンマド＝アミン・ムハンマド＝ユースフ(Muhammad Amin Muhammad Yusuf, 1954-) ⁹⁾ が亡き兄を追悼して著した伝記『イスラームに捧げられた人生：故 導師ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフの記憶に捧げられる』〔MYMA 2016〕と、彼の著作を多く刊行している出版社ヒラルル・ナシュルの重鎮アフマド＝ムハンマド・トゥルスン(Ahmad Muhammad Turusn, 1949-) ¹⁰⁾ の編集になる伝記的な追悼集『ムハンマド——彼に神の祝福と平安あれ——に忠実なムハン

9) ムハンマド＝アミンは、イマーム・ブハーリー名称タシュケント・イスラーム高等学院を修了した後、中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局のファトワー部門長秘書や、その機関誌『ソヴィエト東方のムスリム』の編集者の職などを務めた経歴を持つ。

10) トゥルスンは、2015年9月2日にタシュケントで実施した同氏へのインタビューによれば、19世紀のナマンガンで権勢を誇ったナクシュバンディー・ムジャッディディーヤの高名なスーフイー、マジュズーブ・ナマンガーニー (Abdulaziz Majzub Namanganiy, d.1856/1857) の7代目の子孫にあたる〔川本・河原・和崎 2016: 53-55〕。そのさい、彼はかつてリビアのイスラーム・ダアワ学部(詳しくは後述)で学んだとも語った。

マド＝サーディク：故 高德の導師ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフについての同時代者たちによる回想』[Tursun 2018] の2点を取り上げる。これらには、生前に彼が語ったとされる発言が数多く含まれている。

ただし、以上の資料では、ムハンマド＝サーディクと交流のあった人物についての説明がなされることは少なく、またいくつかの例外を除き、彼の活動と思想の軌跡の手がかりとなる情報が断片的に記され、散逸している。本稿では前掲書の『ウズベキスタンのウラマーたち』やオルコットの研究なども活用して、これらすべてを有機的に結びつけ、彼の思想形成の過程をより十全に分析する。

II. 思想の原点としての家族文化¹¹⁾

1. 両親と親戚

ムハンマド＝サーディクは1952年4月15日、アンディジャン州アサカ郡ニヤーズ・バーティル (Niyozbotir) 村に生まれた。彼の性格は幼年の頃から真面目で内気、ないしは穏やかであったという。彼が近所の子供たちと遊ぶことは、ほとんどなかったとされる。ウズベキスタンでは斎戒月に子供たちが近所の家々を歌い回って金品を乞う慣習があるが、ムハンマド＝サーディクは歌も歌わず、何も貰わずに家路についたそうである。また彼が誰かと喧嘩したり、人を罵ったりすることはなく、年少者にも「あなた」(siz) という敬称を使う、礼儀正しい子供であったという。

ムハンマド＝サーディクの父ムハンマド

＝ユースフ・バーイボタエフ (Muhammad Yusuf Boybo‘taev, 1922–2004) は、羊飼いの家の出であった¹²⁾。彼は初等・中等学校を卒業した後、自身の父バーイボタ・コシュボタ・オグリ (Boybo‘ta Qo‘shbo‘ta o‘g‘li) と共にコルホーズで羊飼育をして暮らした。そのかわり、ムハンマド＝ユースフは幼少期から母方オジのムッラー・パルピー・ラヒーモフ (Mulla Parpi Rahimov) から宗教教育を受けていた。ムッラー・パルピーはマドラサでイスラーム諸学を修め、児童の宗教教育にも熱心な人物であった。その甲斐あってか、彼の長男ムハンマドサーリフ・パルピーエフ (Muhammadsolih Parpiev, 1919–2006) は1950年、当時ソ連で唯一のマドラサであったブハラのみーリ・アラブ・マドラサ¹³⁾ に入学する。ムハンマド＝ユースフは、この3歳年上の母方イトコに触発され、1951年、このマドラサに見事入学を果たした。

ムハンマド＝サーディクの母サビールハン・ティラクベルディ・クズィ (Sobirxon Tilakberdi qizi, 1928–1996) も、コルホーズでは労働者として羊を飼育し、家庭ではムスリマとして敬虔な生活を送った。ムハンマド＝サーディク (「ムハンマドに忠実な」の意味) の名づけ親は彼女である。彼女は自らも、子供たちの喉が常に清浄たるようにと、「タハーラ (taharat: 浄め) をせずには母は子に授乳するなかれ」というイスラームの習慣に忠実であったとされる。夫がマドラサの学徒になると、生活は困難をきわめ、彼女は州内のマルハマト郡カラ・クルガン (Qoraqo‘rg‘on) 村の実家に戻った。

11) 以下、この章について特に言及しない限り、[MYMA 2016: 10–37, 97] を参照した。

12) オルコットは、ムハンマド＝ユースフの父の名前を「ムハンマドアリー・ダームッラー・アンディジャーニー」、また職業を「マドラサの教師」と記している [Olcott 2012: 109]。ムハンマド＝サーディクの高弟の1人、ハサンハン・ヤフヤー・アブドゥルマジード氏からの私信によれば、この記述は誤りであるとされた。

13) ミーリ・アラブ・マドラサは1927年に閉鎖されたが、1945年に政権から再開を許可された。このマドラサは4年制とされ、イスラーム諸学の基礎が教えられた [Muminov, Gafurov and Shigabudinov 2010: 268]。

ムハンマド＝ユースフはミーリ・アラブ・マドラサへの入学後、課外活動の一環としてブハラ市近郊のパハウッディーン・ナクシュバンド廟の管理人に任命された。この廟の周辺は1950年代前半、冠水が目立ち、ハーンカー (*khānqāh*: タリーカの修行場) 内にも葦が生えるなど荒廃していたという。この廟の整備に成功し、参詣者数を増加させたムハンマド＝ユースフの手腕を評価した宗務局の第2代ムフティー、ズィヤーウッディーンハン・ババハノフ (Ziyovuddinxon Boboxonov, 1908–1982) (在任期間1957–1982) は、彼にこの廟の常任の管理人になることを勧める。しかし、彼は勉学の継続を望み、これを固辞した。その後、ミーリ・アラブ・マドラサを修了した彼は、当時再開されたばかりのタシュケントのバラクハン・マドラサ¹⁴⁾ に進学した。

ムハンマド＝ユースフは1959年、宗務局からアンディジャン州ブラク・バシ郡の由緒あるクルグズ・バーイ集会モスクに派遣され、一生涯イマーム・ハティーブ (*imām khatīb*: 説教師) の職を務めた。1960年には、家族全員がそこに引っ越した。彼は当時、上記の集会モスクで生じていた宗教的内紛を治めたことにより、上述したズィヤーウッディーンハンとの関係をさらに深めた。その後、彼はアンディジャン州ソヴィエトの代議員にも選出され、地方の名士になっていく。

2. 幼少期における宗教教育 (1952–1970)

父ムハンマド＝ユースフこそ、ムハンマド＝サーディクにイスラーム学の基礎を教えた最初の師である。彼の専門はアラビア

語文学とクルアーン諸学のうち、キラアア (*qirā'a*: クルアーン読誦) 学の基礎分野たるタジュウィード (*tajwid*: クルアーンを読誦するための音声の心得) であった。ムハンマド＝サーディクは幼少期に『語形変化を左右するもの』 (*Awāmil*) や『ザンジャーニー』 (*Zanjānī*)¹⁵⁾、『これで十分』 (*Kāfiyya*)、『千行詩』 (*Alfiyya*) などのアラビア語文法書をすべて暗記したとされる。上記の前者3つの書は、磯貝健一が明らかにした19世紀後半の中央アジアのマドラサ教育のカリキュラムにその名が見い出されるものである [磯貝2009: 107–108; 中西2011: 129–130]¹⁶⁾。

ムハンマド＝サーディクは、この時期の父による宗教教育に自らの思想的な原点があることを前掲書『中道主義』において以下のように記している [MYSMS 2016: 3]。

[いまから] 記憶をたどることがきるほどに成長していた頃、[わたしに] 意味への関心が生じはじめた。最初にして最高の師であった父は、暗記するアーヤ [oyat: クルアーンの各章を構成する節] の意味も説明してくれるようになった。かの方は「どうして?」、「その意味は何ですか?」、「そこから得られる教えは何ですか?」といった質問にも答えてくれるようになった。こうした質問によって得られた答えは [後年にわたしが] わたしたちの宗教の教義を安定させ、世界を異なる視点から眺めるようになる主因となった。

ソ連では科学的無神論の原則の下、宗教的な初等教育機関は完全に閉鎖されていたが、

14) バラクハン・マドラサは1956年11月1日に再開されるが、1961年4月19日にミーリ・アラブ・マドラサに吸収されることになった。なお、後者を修了した後、前者への入学が許された [Muminov, et al. 2010: 268]。

15) 原題は *Kitāb Taṣrif al-Zanjānī* (別名 *Kitāb Taṣrif al-Izzī*) である。この書は中央アジアにおいて少なくとも19世紀後半には、著者の由来名である『ザンジャーニー』の名で流通していた [磯貝2009: 107]。

16) 19世紀後半の中央アジアのマドラサにおいてアラビア語の習得を最優先するカリキュラムは、少なくとも16世紀以来の歴史的な伝統であることが明らかにされている [磯貝2009: 106–112]。

家庭内での宗教教育は禁じられなかった。父ムハンマド＝ユースフは日頃から、「誰かに『イスラームの知識を誰から学んだのか?』と尋ねられたら、最近亡くなったムッラーの名前を言うように」と子供たちに教えていたという。彼は「わが息子が勉学に励み、学者になりますように」と常に祈念をして、暮らしたとされる。ムハンマド＝サーディクは、こうした父母の精神性の下で育った。

Ⅲ. ソヴィエト体制下での 中道主義との出会い

1. 国内での学徒期 (1970–1975)¹⁷⁾

ムハンマド＝サーディクは1970年、ミーリ・アラブ・マドラサに入学した。1学年の入学定員数は30名であった [Muminov, *et al.* 2010: 268]。このマドラサはソ連全体で唯一のマドラサであり、イスラーム諸学をソ連で公式に学ぶことが至難の業であったことは明らかである。しかし、ムハンマド＝サーディクの入学審査では、父ムハンマド＝ユースフの存在が物を言った。先に述べたように、彼はこのマドラサの修了者であったらうえ、この頃には宗務と行政の分野で一定の権威を有していたからである。

ムハンマド＝サーディクは、このマドラサが政権の中東外交のための「見せかけ」の宗教機関であったことを認めつつ、それでも貴重な空間であった、と以下のように記す [MYSMS 2016: 4]。

この知の館 [ミーリ・アラブ・マドラサ] は当時、イスラームについての講義を公然

と行い、[イスラームに] 肯定的な見解を示し、イスラームの教えに対する反対意見に異議を唱える数少ない空間の1つであった。上級生たちは、わたしたちの宗教の優越性を熱心に語ってくれた。同時に、無神論者らによる[宗教への] 懐疑に対する答えも示された。教師たちも少し怖がりながらも、御自身が知っておられることをわれわれ学徒に伝えてくれていた。

ソヴィエト政権が掲げたスローガンの1つであった「諸民族の友好」を象徴するかのようなマドラサでの寄宿舎生活は、ムハンマド＝サーディクにソ連のムスリム地域全体に広がる人脈をもたらした。彼の学友には、後にロシア及び独立国家共同体ヨーロッパ部ムスリム中央宗務局の最高ムフティー (在任期間1996–2015) になるタルガト・タージュディーン (Talगत Tazhuddin, 1948–)¹⁸⁾ や、カフカース・ムスリム宗務局の現ムフティー (在任期間1992–) であるアッラーフシュクル・パシャザーデ (Allahshukur Pashazade, 1949–)¹⁹⁾ などがいた。特にロシアのダゲスタンで後に大きな影響力を持つナクシュバンディー教団の導師イリヤース・イリヤースフ (Il'yas Il'yasov, 1947–2013)²⁰⁾ は、ムハンマド＝サーディクと同じ房室であり、兄弟のような仲であったという。

マドラサでのムハンマド＝サーディクの師は、主に以下の2人であった。第1に、アラビア語文法学を教えていたフェルガナ州コーカンド市出身のムフタールジャン・アブドゥッラーエフ (Muxtorjon Abdullaev, 1928–2002) である。彼はこのマドラサを

17) 以下、国内での学徒期について特に言及しない限り、[MYMA 2016: 38–59, 173] を参照した。

18) 彼はソ連ヨーロッパ部及びシベリア・ムスリム宗務局のムフティー (在任期間1980–1992) でもあった。

19) 彼はザカフカース・ムスリム宗務局のムフティー (在任期間1979–1992) でもあった。

20) イリヤース・イリヤースフについては、[Bobrovnikov 2017: 112] を参照した。急進的なイスラーム主義者をしばしば糾弾していた彼は、2017年7月13日に首都マハチカラで車中にいるところを2人組の男たちに銃撃され、死亡した (<http://www.asianews.it/news-en/Sufi-Imam-murdered-in-Dagestan,-the-volatile-republic-of-the-Russian-Caucasus-28656.html> [2020年9月10日閲覧])。

1958年に修了した後の1961–1963年に、シリアのダマスカス大学に留学した経歴を持つ²¹⁾。第2に、キラア学を教えていたアンディジャン州アンディジャン市出身のシャハービディーン・ムーミノフ (Shahobiddin Mo‘minov, 1892–1975) である。彼はムハンマド＝ユースフと、後にハーフィズ (*ḥāfiẓ*: 朗誦者) として名を馳せるムハンマド＝ムビン・アミーノフ (Muhammad Mubin Aminov, 1914–1979) の師でもあった。

ムハンマド＝サーディクは、1971年にイマーム・ブハーリー記念タシュケント・イスラーム高等学院が最高学府として開設されると、そこで勉学を継続した [MYMA 2016: 58]。そこでの彼の師は、宗務局の第2代ムフティーであったズィヤーウッディーンハンヤ、ムフティー補佐にしてカーディー (*qādi*: イスラームの法官) の職 (在任期間 1957–1976) も務めていたナマンガン州ヤンギ・クルガン郡出身のイスマーイール・マフドゥーム・サッティーエフ (Ismoil maxdum Sottiev, 1893–1976) などであった。

ムハンマド＝サーディクは、ここでの学徒生活の中で、後に中道主義の思想と結びつく「中庸」の概念と出会う。彼は当時の経験を以下のように回想している [MYSMS 2016: 4]。

タシュケント・イスラーム高等学院で教育を受けていた頃、わたしたちはイスラームの真実が20世紀のウラマーにより同時代的な精神から語られている数冊の書籍を読みはじめた。それらの書籍には、イスラームの教えと他宗教の比較も内容に含まれていた。この比較は、その時代の条件の下での実例にもとづいていた。そこで、イスラ

ムは一方に偏ることのない中庸の [mo‘tadil] 宗教であるとの説明が何度もなされていた……こうして「イスラームは中庸 [mo‘tadillik] の宗教である」とする偉大な標語がわたしたちの意識に上りはじめた。

イスラーム高等学院の学徒の中でも群を抜く読書量で知られたムハンマド＝サーディクは、当時宗務局で「No.2」の存在であった上述のサッティーエフの目にとまり、彼の娘ファーティマハン (Fotimaxon) と在学中に結婚した。サッティーエフとムハンマド＝ユースフも旧知の仲であった [Olcott 2012: 109]。ムハンマド＝サーディクは1975年にイスラーム高等学院を修了した後、宗務局の機関誌『ソヴィエト東方のムスリム』で働きはじめる。前述したムハンマド＝ユースフの母方イトコ、ムハンマドサーリフも、この頃には宗務局のクルグズ共和国支部長 (在任期間 1974–1981) に就いていた。彼ら一族は宗務局のイスラーム、すなわち体制派の「公式のイスラーム」の世界で中心的な存在になっていた。

2. リビア留学期 (1976–1980)

ムハンマド＝サーディクは1976年、リビアの革命指導者ムアンマル・カザーフィー (Mu‘ammar al-Qadhāfi, 1942–2011) 政権下の首都トリポリに本部が置かれた世界イスラーム・ダアワ協会 (1970–1972年創設) 直属のイスラーム・ダアワ学部²²⁾に留学した。ソ連のイスラーム学徒の中で海外に留学できる者はごく少数であったが、彼の場合には妻方の助力もあり、その権利が得られた

21) ラマダーン・ブーティーは1960年、シリアのダマスカス大学シャリーア学部の教員になった [MYSMS 2018a: 4]。それゆえ、1961年に留学したムフタルジャンは、同学部で彼の講義を受けていた可能性がある。

22) ソ連のイスラーム学徒のうち、最も優秀な者はエジプトのアズハル学院に留学したと言われる。その他の留学先としては、前述したシリアのダマスカス大学シャリーア学部やスーダンのウンム・ダルマーン・イスラーム大学などが挙げられる [Yo‘ldoshxo‘jaev va Qayumova 2015: 84, 110, 128]。

[Olcott 2012: 110]。1977年に社会主義に体制移行するリビアは、ソ連のイスラーム学徒の留学先として当局にとって無難な場所であったとされる [Olcott 2007b: 7]。イスラーム・ダアワ学部にはさまざまな国の留学生がおり、ムハンマド＝サーディクは日本や中国、インドネシア、フィリピン、マレーシア、ボスニアなどからの留学生らとも学んだという [MYMA 2016: 56, 173]。

タシュケント・イスラーム高等学院でムハンマド＝サーディクの中に醸成されはじめた「中庸」の概念は、このイスラーム・ダアワ学部でいっそう育まれることになる。ただし、彼はこの概念が現実の世界の中で一切見出されないことに当惑していた、とも語っている [MYSMS 2016: 5]。

[イスラーム・ダアワ学部で学んでいた頃] 数多くの師がまさに中道主義、すなわち中庸の意味に格段の関心を払い、このイスラームの特徴が至高なるアッラーの大きな恵みであることをひたすらに繰り返し、強調していた。しかし、ムスリム世界の多くの人々はこの深遠な意味を理解していないように、わたしたちには思えた。[テレビやラジオで] 見聞きし、[新聞などで] 読んでいた出来事が「イスラームは中庸の宗教である」という標語と一致しないことを不思議に思いながら、わたしたちは[この標語を] 受け入れていた。

リビアでの留学期間は、ムハンマド＝サーディクの思想の形成過程としてだけでなく、現代イスラーム世界の知的権威たちとの人脈の形成過程としても重要であった。イスラーム・ダアワ学部で彼が師と仰いだ人物は、主にムハンマド・アフマド・シャリーフ (Muhammad Ahmad Sharif, 1937-) であった。ムハンマド＝サーディクの幼馴染に

して、宗務局のムフティー補佐の職 (在任期間 1990–1994) を務めたアンディジャン州パフタ・アーバード郡出身のザークルジャーン・イスマーイーロフ (Zokirjon Ismoilov, 1948-) は、このことについて以下のように綴る [Ismoilov 2018: 24]。

[ムハンマド＝サーディクがリビアから] 休暇で帰郷すると、わたしたちは連絡をとり合い、必ず会っていた……彼の家か、わたしたちの家で……互いの肩に首を置き合い、退屈すれば寄りかかり、時に寝そべりながら眠るまで語り合っていた。彼は自身が学ぶ機関 [イスラーム・ダアワ学部] や、現地の高名な学者のうち、ムハンマド・アフマド・シャリーフについてよく語っていた。彼が世界の学者の中で最も名声のある学者の1人だ、と繰り返し語っていた。

アフマド・シャリーフは、当時イスラーム・ダアワ学部で教鞭をとっていた一方、リビアの教育大臣の職 (在任期間 1972–1980) も務め、後には世界イスラーム・ダアワ協会事務局長 (在任期間 1980–2011) に就任するほどの有力者であった²³⁾。ムハンマド＝サーディクの弟ムハンマド＝アミーンは自身がリビアを訪問したさいの経験について、以下のように語っている [MYMA 2016: 55]。

リビア人の師らはムハンマド＝サーディクをととても誇っていた。とりわけムハンマド・アフマド・シャリーフ博士は、兄を自分の子供であるかのように寵愛していた。彼はムハンマド＝サーディクと後に一緒に仕事をする日が来る、と語り、何事も彼 [ムハンマド＝サーディク] に相談して物事を決めていた。リビアの指導者であったムアンマル・カッザーフィー (神の慈悲あれ)

23) アフマド・シャリーフについては、日本エネルギー経済研究所の小林周氏のご教示に拠る。

は常に「ムハンマド＝サーディクはわれわれ自身の誇りだ」と語っていた。

アフマド・シャリーフは、ムハンマド＝サーディクなど優秀な学生を自宅に招き、個人所蔵の稀少な宗教書を用いた特別講義も行っていたという [Ismoilov 2018: 24]。さらに、彼はムハンマド＝サーディクを国際会議にしばしば連れて行き、イスラーム世界の知的権威たちとも交流させた [MYMA 2016: 55]。

そうしたなか、ムハンマド＝サーディクはアフマド・シャリーフに連れられ、エジプトとシリアの(元)ムスリム同胞団の面々が集った会合に出席する。彼はウズベキスタンに一時帰国したさい、上述した幼馴染のイスマリーロフにその会合での体験を以下のように語ったという [Ismoilov 2018: 24-25]。

1980年頃、師ムハンマド・アフマド・シャリーフは、優秀な弟子であったムハンマド＝サーディクを高名な学者たちが集う会合に連れて行ったらしい。その会合で導師アフマド・シャリーフは「これはわたしの内弟子であり、非アラブ出身だが、アラブ人を凌駕する」と言ったという。会合の議長が現在であれば〔中道主義を国際的に広めた〕ユースフ・カラダーウィーであったであろうが、当時は別のエジプト人学者、思い違いでなければ〔中道主義を国際的に広めた〕ムハンマド・ガザリーが会合を取り仕切っていた。カザリーは「[あなたの]弟子に3分、時間を与えよう。われわれ全員に演壇から語りかけてみてくれ!」と言ったらしい。ムハンマド＝サーディクは演壇に上り、しばらく話をした。すると、会合を取り仕切っていた人物〔ムハンマド・ガザリー〕は「[いま]話し

た内容をすべて暗記していたのか?」と尋ねてきたという。ムハンマド＝サーディクが「はい」と答えると、彼は歓びを隠しきれずに「いい、いい」と褒め称えたそうである……その会合の参加者の多くはエジプト出身者であった。わたしの記憶に残っている〔この会合にいた〕シリア人学者としては〔シリアのムスリム同胞団のイデオログであった〕サイード・ハウワー [Sa'īd Ḥawwā, 1935-1989²⁴⁾] や……〔エジプト人学者としては、サイード・クトゥブの弟にして、ウサーマ・ビン・ラーディン (Usāma ibn Muḥammad ibn Lādin, 1957-2011) の師であった²⁵⁾〕著名な学者ムハンマド・クトゥブ [Muḥammad Qutb, 1919-2014] ……の写真もその〔会合の記念〕アルバムにはあった。

この会合での出会いは、ムハンマド＝サーディクの中で醸成されはじめていた「中庸」の概念を中道主義に結びつける重要な機会の一つになった可能性がある。前述のとおり、ムハンマド・ガザリーこそ、カラダーウィーと並び、中道主義を国際的に普及させた中心人物だからである。

IV. 中道主義の普及の困難

1. 留学後からペレストロイカ改革中後期まで (1980-1989)

ムハンマド＝サーディクは1980年にリビアから帰国し、タシュケント・イスラーム高等学院と宗務局の国際渉外部で働きはじめた²⁶⁾。イスラーム高等学院では学院長にもなった [Olcott 2012: 110]。そこで彼は入学試験での縁故を問題視し、受験者の知識を重視した。学習要領の改革も行った。従来は哲

24) サイード・ハウワーについては [小杉 1993: 49] を参照した。

25) ムハンマド・クトゥブについては [保坂 2001: 31-32] を参照した。

26) 以下、この段落から4つ目の段落までについて特に言及しない限り、[MYMA 2016: 59-68] を参照した。

学や地理、ロシア語など世俗科目が多く、宗教科目は少なかったが、彼は政権側の責任者と交渉し、世俗科目を減らす一方で宗教科目を増やし、さらにアラビア語を重視した。

この学習要領の改革と同時に、各宗教科目で扱われる教科書も変更された [Qodirov 2018: 18]。1970年代のミーリ・アラブ・マドラサとイスラーム高等学院において、たとえば啓典解釈学の講義ではスューティー (Jalāl al-Dīn Abū al-Faḍl ‘Abd al-Raḥmān ibn Abī Bakr al-Khuḍayrī al-Suyūṭī, 1445–1505) らによる『ジャラーラインの啓典解釈書』やアブー・バラカート・ナサフィー (Ḥāfiz al-Dīn Abū al-Barakāt ‘Abd Allāh ibn Aḥmad al-Nasafi, ?–1310) による『啓示の認知と解釈の神髄』などの古典が学ばれていた。これが変更後には、現代シリアを代表するイスラーム学者の1人ムハンマド・アリー・サーブーニー (Muḥammad ‘Alī al-Sābūnī, 1930–) による『告げられたものの傑作：クルアーンにおける規則の諸説の解釈』などに置き換えられた。

ソヴィエト政権の高官たちは、中東外交の一環としてイスラームの国際会議を催すさいには、リビアから帰国したムハンマド＝サーディクの活用が成功の鍵となることに気がついた。アラブ諸国からの来賓たちが彼を見ると心を開き、ソ連側の要人たちとすぐに打ち解けたからである [Ismoilov 2018: 26]。こうして彼は通訳として、現代イスラーム世界の知的権威たちとの交流をさらに深めていく。当時ソ連を最も頻繁に訪問していたイスラーム学者の1人に、シリアのバアス党政権下の最高ムフティー、アフマド・クフターロー (Aḥmad Kuftārū, 1915–2004) がいた。彼はムハンマド＝サーディクを敬愛し、アンディジャン州の実家に宿泊しさえした。ウズベキスタンで彼は、ブハラの子ナクシュバンド廟の再建に大きな資金援助をしたことでも知

られる。

イスラーム高等学院の改革と宗務局での仕事は順調であったが、国内における中道主義の普及活動は大きな壁にぶつかっていた。1985年3月、ソ連共産党第一書記にミハイル・ゴルバチョフ (Mikhail Gorbachev, 1931–) (在任期間1985–1991) が就任し、ペレストロイカ (perestroika: 再建) 改革が始まると、社会的・政治的な批判精神こそを良しとする風土が形成された。その結果、「中庸」は「臆病」と読み替えられ、その意義が人々の心を捉えることは稀であったとされる。ムハンマド＝サーディクは、当時の時代的な状況を以下のように振り返っている [MYSMS 2016: 5]。

留学を終えて帰国した後、人々との交流でも [イスラーム高等学院の] 講義でも、さまざまな教えと共に [わたしたちは] イスラームが中道主義、すなわち中庸の宗教であることに格段の関心を払うよう努めていた。しかし、このことに意義を認める人たちの [数の] 少なさに、わたしたちは驚嘆した。大半の人々が、中庸をまるで臆病として受け止めるようになってしまったようであった。当時は再建 [ペレストロイカ] の風が吹き、社会の現状を糾弾する取り組みがはじまっていたことがこれに影響していたとしても、[それは] 驚きではない。

ペレストロイカ後期に急激に高まるウズベキスタンのイスラーム復興は、コーカンド地方チャール・バグ (Chorbog⁴) 村出身のハナフィー伝統派の学者ムハンマドジャー・ヒンドゥスターニー (Muhammadjon Hindustoniy, 1892–1989) と教え子たちの決別によるムスリム社会の分断と共に、生じる²⁷⁾。ヒンドゥスターニーは1914年頃まではブハラなどのマドラサで、後にアフガニス

27) 以下、本節の最後までについて特に注記しない限り、[Babadjanov and Kamilov 2001: 196–205] を参照した。

タンのバルフなどで学び、さらに北インドのカシュミールのマドラサで8年間学んだ。ただし、帰郷した彼は1933–1953年の20年間に3度逮捕され、約10年間に刑務所で過ごす。当時のソ連の最高指導者ヨシフ・スターリン (Iosif Stalin, 1878–1953.3) の死去により釈放された彼は、最終的にタジキスタンの首都ドゥシャンベの科学アカデミー東洋学研究所写本部門で働いた [アブドゥルマジード 2019: 36]。

1953年6月にソ連の最高指導者となったニキータ・フルシチョフ (Nikita Khrushchev, 1894–1971) の「雪どけ」の時代、ヒンドゥスターニーはフジュラ (hujra: 非公式の宗教学校・私塾) を開設した。彼の代表作『クルアーンの翻訳における弁別的説述』(1979年頃) は当時のウズベク語による啓典解釈書の最高傑作と評された。しかし、1970年代末までには彼の教え子の中からも、ハナフィー派の規定から離反する者たちが現れた。その代表格に、第一世代の教え子であったフェルガナ州マルギラン市出身のハキームジャーニ (またはアブドゥルハキーム)・カーリー (Mulla Hakimjon/Abdulkhaki qori Marg'iloniy, 1896–2011) がいた²⁸⁾。その後の世代でも、コーカンド市出身のラフマトゥッラー・アッラーマ (Rahmatulla

Alloma, 1950–1981) と、アンディジャン州アルティン・クル郡出身のアブドゥワリー・カーリー (Abduvali qori Mirzaev, 1950–1995?) がいた。彼らはマルギランのハキームジャーニのフジュラでも学んだ。タジキスタン出身の教え子には、後にタジキスタン・イスラーム復興運動の議長となるアブドゥッラー・ヌーリー (Sayyid Abdulloh Nuri, 1947–2006) やタジキスタン・イスラーム復興党の党代表となるムハンマド・シャリーフ・ヒンマトザード (Muhammad Sharif Himmatzoda, 1951–2010) らがいた²⁹⁾。

彼らがヒンドゥスターニーと決別した主な理由は、イスラームの保持のために世俗主義政権に迎合するという彼の無抵抗に過ぎる態度にあった [Olcott 2007a: 20]。特にジハード論が大きな争点になった。ジハードの遂行がムスリムの虐殺と敗北を明らかにもたらす場合、それは容認されない、とヒンドゥスターニーが説いた一方³⁰⁾、ハキームジャーニらはその遂行を積極的に主張した。加えて、葬送儀礼や病氣治療でのクルアーンの朗誦や聖者崇敬などをハナフィー派の規定に適うとするヒンドゥスターニーの伝統墨守の立場も決別の理由となった [Olcott 2007a: 20, 26]。

ヒンドゥスターニーは、ハナフィー派の規

28) ハキームジャーニは、スンナ派正統4法学派の規定を否定するアフレ・ハディース (*Ahli al-Hadith*) の信奉者であった父アブドゥワースィー・カーリー (Abduvosiy qori) から宗教の基礎を学んだ [Olcott 2007a: 22]。この潮流の中央アジアにおける源流は「シャミー・ダームッラー」の名で知られるタシュケントのシャミー・タラーブルスィー (Sa'id ibn Muhammad ibn 'Abd al-Wahid ibn 'Ali al-'Asali al-Tarablusi al-Shāmi al-Dimashq, 1870頃–1932) にさかのぼる。彼はオスマン帝国下のシリアから追放された後、1919年に内戦下の中央アジアに入ったシャフイー派の学者であり、この地の「保守派」(ハナフィー派とスーフィズム)の牙城を突き崩す「進歩的」な学者としてソヴィエト政権に活動を許された [小松 2014: 57–58]。

29) ヌーリーとヒンマトザードが後に就くことになる組織での肩書について、[帯谷 2004: 123] を参照した。

30) ヒンドゥスターニーは、彼のもう1つの代表作『宗教に許容できない革新をもたしている者たちに対する書簡』で、19世紀末のアンディジャン蜂起を例に挙げ、ジハードの積極的な回避を説いている。1898年、アンディジャンのスーフィー、ドクチ・イシャーン (Dukchi ishon) はジハードの名の下で、斧と棒しか持たない約70,000人の男たちを先導し、銃で武装した200人の兵士が駐屯する現地のロシア軍兵営を攻撃した。その結果、彼らは惨敗し、彼が暮らしていた村の住民数千人も同軍により虐殺され、ロシア支配をさらに拡大させた [Babadjanov and Kamilov 2001: 212–214]。この民衆蜂起については [小松 1986] にも詳しい。

定から離反する者をムスリム社会に分断をもたらず敵として「ワッハービー」(vahhobiy)と呼んだ³¹⁾。この名づけの根拠は、ハキームジャーンらが古典的なイスラーム主義³²⁾思想・運動の成立に大きな影響を与えた学者らを信奉していたことにある。彼はまた余多の「ワッハービー」を育てたことから「中央アジアのワッハービーの父」と呼ばれる[Abdovakhitov 1993: 82]。彼の私設図書館にはイブン・カスィール (Ibn Kathir, 1300頃-1373)の古典的な啓典解釈書『偉大なるクルアーンの解釈書』やイブン・タイミーヤの著作があり、彼は特にイブン・タイミーヤを宗教的霊性の源泉としたという[Olcott 2007a: 23]。アブドゥワリーはアブドゥルワッハーブの『唯一性』やサイイド・クトゥブの啓典解釈書『クルアーンの陰で』、パキスタン出身のアブー・アラール・マウドゥディー (Saiyid Abū al-A'la Maudūdī, 1903-1979)の著作から思想的影響を得た[Olcott 2007a: 24]。ラフマトゥッラーの私設図書館には、サイイド・クトゥブやマウドゥディーの著作の地下出版による露語訳書があったとされる[Olcott 2007a: 24]。

これらの書籍(地下出版物を除く)の入手方法は、第1にマッカ巡礼者による国内への持ち込み、第2にアラブ諸国(特に1960年代末のサウジアラビア)の外交団による宗務局への寄進であった。ソヴィエト政権は、これを大石油外交の一部として活用し、アラブ諸国との関係改善を試みていた。

アラブ諸国からウズベキスタンに持ち込まれた主にアラビア語による宗教書は、世界の

出来事をソヴィエト政権とは全く異なる見方で眺め、この地のムスリムに「隠蔽されていた真実」を開示してくれるものであった。特にワッハーブ主義運動の指導者らが苦難を乗り越え、その「浄化された信仰」をサウジアラビアの国家イデオロギーに据えることに成功したという「真実」は、フェルガナ盆地³³⁾の急進的なイスラーム主義者のモデルになったに違いない。ラフマトゥッラーは、彼らが樹立を目指したイスラーム国家を「ムスルマーン・アーバード」(Musulmonobod: ムスリムの町)と呼んだ[Abdovakhitov 1993: 82]。

ラフマトゥッラーとアブドゥワリーは、ハキームジャーンの教えを受け入れていたが、彼の宗教活動への消極性を理由に、1970年代末までには彼から距離を置きはじめていた[Olcott 2007a: 31]。彼らは新たな活動を開始しない限り、中央アジアでイスラームは消滅すると危惧し、地下出版物の拡充を試みた[Abdovakhitov 1993: 82-83; Olcott 2007a: 31]。そのさい、マウドゥディーの著作を『第25回ソ連共産党大会資料集』と題された表紙で綴じるなどの工夫がなされていたという[Abdovakhitov 1993: 83]。ただし、ラフマトゥッラーは1981年、交通事故で他界する³⁴⁾。1980年代半ば頃のウズベキスタンでは、部分的な資本主義化の影響からソヴィエトの統制が緩み、無神論系の大学も印刷機を安価で貸出し、イスラーム主義の地下出版物の拡充に貢献していたとされる[Olcott 2007a: 31]。

1989年、ヒンドゥスターニーは他界した。

31) この用語は、中央アジア諸国やロシアなどでは「原理主義者」や「急進派」、「過激派」の意味でふつう使われる。

32) イスラーム主義とは、19世紀末以降のオスマン帝国の崩壊とその後の中東で「あるべき秩序」をめぐって生まれた、イスラームに立脚した社会変革と国家建設を目指すイデオロギーを指す[末近2018: 2, 9-10]。

33) フェルガナ盆地は、現在のウズベキスタンのアンディジャン州とフェルガナ州、ナマンガン州、クルグズのオシュ州とジャララバード州、バトケン州のそれぞれ一部、タジキスタンのソグド州の一部からなる。

34) ラフマトゥッラーの交通事故死については、KGBの名で有名なソ連国家保安委員会による暗殺説が根強い。

それは、この地におけるムスリム社会の分断を阻止しようとする最初の試みの終焉を象徴するものであった。その後、調停役を失ったこの地のムスリム社会は分裂を拡大させていく。その中で、この役割を継承した人物がムハンマド＝サーディクであった。

2. 宗務局長時代（1989–1993）

1989年3月、タシュケントで催された第4回中央アジア・カザフスタン・ムスリム大会で「反イスラーム政策の停止」が公式に宣言された〔小松 1994: 45〕。これによって、中央アジアでは自らの民族文化に回復しようとする大きな民意の中で、イスラーム復興が急激に生じていく。1989年2月、上記の大会でムハンマド＝サーディクは宗務局の第4代ムフティーに選出された。国内で民衆が選出した最初のムフティーの誕生であった〔ババジャノフ 2003: 178〕。同年12月にはソヴィエト連邦最高会議の議員にも選出された。彼はこの宗教的・政治的な権威を使い、ムスリム社会の分断の阻止と宗務局の政権からの自立に努め、イスラームの再興を図った〔Olcott 2012: 110〕。

ムハンマド＝サーディクによる政権への働きかけの結果、ウズベキスタンではイマーム・ハティーブの養成体制の強化、モスクとマドラサの建設、女性の宗教教育の開始、宗教出版物の規制緩和など、多様な改革が実現した〔MYMA 2016: 69–71, 82–84〕。彼がムフティー職を務めた期間（1989–1993）、国内のマドラサの数は2から14、政府公認モスクの数は188から5,000に増えた〔Olcott 2012: 112〕。こうして、彼は政権に不満を募らせていた多くのムスリム民衆の心を魅了した。

ムハンマド＝サーディクは、宗務局の自立性の向上とその財源の拡大に成功したが、国内の宗教的権威の数が増えた結果、自らの支持基盤を固める必要に迫られた³⁵⁾。これに彼

は教育機関の教科書に自らの思想的源泉であるアラブ世界の学者による宗教書を採用することなどにより、対処を図った。一方、ムスリム民衆の大半は自分なりの信仰のあり方を享受できる現状に満足し、慣習を宗教的に正当化するハナフィー伝統派の学者を好んだ。このことはイスラーム改革思想に傾倒するハナフィー革新派の学者たるムハンマド＝サーディクを困らせた。しかし、彼は宗務局のムフティーとしての立場を生かし、聖者崇敬での多神教的なふるまいを是正するファトワーを出すなどして、これに対処した。

ムハンマド＝サーディクは、汎イスラーム主義的な思想の持主であった。たとえば、1990年の第2回ウズベク・ソヴィエト連邦人民代議員大会で、彼は中央アジアの諸民族が歴史的に「ムスリム」という1つの集団であり、それを民族という単位に分断しようとする営みは慎むべきだ、と語っている〔Olcott 2012: 112〕。また、弟のムハンマド＝アミンによれば、ムハンマド＝サーディクは、イスラーム自体が1つの党であると述べ、世俗的な民主主義運動組織ビルリク（統一）などを支持せず、ウズベキスタン・イスラーム復興党の設立にも反対したとされる〔MYMA 2016: 73, 131–132〕。

しかし、ペレストロイカ後期の社会の風潮は急進的なイスラーム主義者に追い風となり、調停役としてのムハンマド＝サーディクを苦しめた。以前にも増して強まった批判精神の風土が中道主義の意義をさらに低めたからである。彼は当時の苦しい胸の内を以下のように吐露する〔MYSMS 2016: 5〕。

情報公開〔グラスノスチ (glasnost')〕の政治が進展するにつれ、〔社会〕批判を行う者たちの語り口は激しくなった。次第に中庸の意味には関心が払われなくなり、中庸〔という言葉〕を口に出した者は臆病者

35) この段落については〔Olcott 2012: 113–114〕を参照した。

と非難されるようになった。この頃は、イスラームを誇示し、さまざまな声明と演説で頭角をあらわした人々が溢れ返っていた時期に重なる。彼らの信奉者も増えていった。流行に迎合する人々から賛辞を受ける者たち〔アブドゥワリーなど急進的なイスラーム主義者の勢い〕を止めよ、という〔政権からの〕命令は〔実現〕不可能であった。

1991年11月、ムハンマド＝サーディクはフェルガナ盆地の急進的なイスラーム主義者とハナフィー伝統派の調停を試み、宗務局で公開討論の場を設けたが、そこでの議論は暴力沙汰にまで発展し、結果的に両派の対立を修復不可能なほどに深めてしまう〔Babadjanov and Kamilov 2001: 205〕。

急進的なイスラーム主義の諸潮流は、ペレストロイカ改革から独立後の数年までの間に、アラブ諸国からイスラーム主義運動の書籍が大量に国内に流入したことにより、フェルガナ盆地とタシュケントで劇的に広まるとされる〔Babadjanov and Kamilov 2001: 205〕。これらの潮流に共通する「原理主義」思想とは、「この地域にすでに定着している伝統的な教義を否定し、『純粋なイスラーム』の時代、すなわちかつて理想的な国家、カリフ国の建設に成功したという4人の後継者の時代への回帰を掲げる思想」〔ババジャノフ 2003: 185〕であった。

ナマンガンでのイスラーム主義運動は、その規模と急進性の点で突出していた。ハナフィー急進派の学者ウマルハン・ダームッラー (Umarxon domla, 1950-) は、宗務局のムフティーとなったムハンマド＝サーディクからナマンガンでの「カーディー」(ここでは「代理人」の意味)に選ばれ、州内のムスリムの統率を任されていた³⁶⁾。彼はマルギ

ランのハキームジャーノフ、後にはタシュケントのハナフィー伝統派の学者のフジュラで学んだとされる。ウマルハンは1990年、自らが管轄するモスクで毎週土曜日に宗教問題を議論する場を設けた。そこには彼の信奉者やイスラーム主義者、スーフィーらが集まり、また1996年にアフガニスタンで武装組織ウズベキスタン・イスラーム運動を結成するターヒル・ヨルダシェフ (Tohir Yoʻldoshev, 1967-2009) もその常連であったという。この頃までに自警団アダーラト (正義) は、ウマルハンの影響下に置かれ、軽犯罪にシャリーアに則った刑罰を科す民警団、イスラーム戦士団 (別名イスラーム・アダーラティ) に姿を変えていた。

ウズベキスタンの独立宣言から3ヶ月後の1991年12月、イスラーム戦士団らによりナマンガンの共産党州委員会の建物が占拠される事件が起きた。彼らはこの時までには州の治安維持機能と予算の一部も奪っていた〔Olcott 2012: 114〕。初代大統領イスラム・カリモフ (Islom Karimov, 1938-2016) (在任期間1991-2016.9) が現場に赴くと、先に述べたヨルダシェフは群衆の面前で彼を罵倒し、ウズベキスタン・イスラーム共和国の樹立を訴えた。カリモフ大統領はその場を懐柔的な態度でしのぐとすぐに、彼らの検挙に当たった。1990年代半ばまでに、ヨルダシェフやジュマ・ナマンガニー (Juma Namanganiy, 1968/69-2001) らイスラーム戦士団は国外逃亡を余儀なくされた。

一方、アンディジャンでのイスラーム主義運動は、相対的により小規模であったとされる。ただし、アブドゥワリーのフジュラを擁するアンディジャンがイスラーム主義思想の一大拠点であったことに違いはない³⁷⁾。ナマンガンのヨルダシェフも彼の教えに心酔して

36) 以下、ナマンガンでの宗教運動の状況について特に言及しない限り、〔Olcott 2007a: 35-39〕を参照した。

37) 以下、アンディジャンでの宗教運動について特に言及しない限り、〔Olcott 2007a: 32-34〕を参照した。

いたことで知られる。アブドゥワリーの代表作たる啓典解釈書『クルアーンの陰の陰で』は、サイイド・クトゥブによる啓典解釈書『クルアーンの陰で』に大きく依拠している。ムハンマド＝サーディクは、この書で彼がイスラーム以前の慣習に極端に不寛容な点をハナフィー派の規定からの離反とみなした [Olcott 2012: 115]。アブドゥワリーとムハンマド＝サーディクは同郷出身であったが、思想的には相容れない関係にあったのである。加えて、アブドゥワリーには宗務局のムフティーになるという野心があった。

アブドゥワリーは、宗務局のムフティーの座を1989年に不本意なかたちでムハンマド＝サーディクに譲ったシャムスィッディーンハン・ババハノフ (Shamsiddinxon Boboxonov, 1937–2003) と結託して、彼が職権を濫用して宗務局の財源となるべき喜捨を横領し、サウジアラビア政府の寄進財たるクルアーンの郵送費に充てたうえ、それを個人的に販売したという業務上横領の疑義で彼を告発した [MYMA 2016: 71; Olcott 2012: 112]。これにムハンマド＝サーディクは、この地のイスラーム復興に必要な財源を確保するために、それを販売したと反論した [Olcott 2012: 112]。さらに、彼は宗務局の臨時大会で、サウジアラビアの世界イスラーム連盟が発行した「寄進財は寄進財と交換できる」とするファトワーを読み上げ、身の潔白を証明しようとした [MYMA 2016: 71]。

政権はフェルガナ盆地の急進的なイスラーム主義者の勢いを抑止できず、ハナフィー伝統派との調停にも失敗したムハンマド＝サーディクを見限った [ババジャノフ 2003: 178–180]。その結果、彼は上記の疑義により、1993年4月にムフティー職を公式に解任された。ただし、ムハンマド＝サーディクは妻方、すなわちサッティーエフ家の政治力により逮捕を免れ、国外追放にとどまった

と言われる [Olcott 2012: 109–110]。独立後の宗務局の第2代ムフティーには、急進的なイスラーム主義者が敵視するスーフィズム、とりわけトルコのナクシュバンディー教団と深い関係を持っていた前述のムフタールジャン・アブドゥッラーエフ (在任期間1993–1997) が就任した。しかし、政権の期待する成果が得られないと、彼もムフティー職を公式に解任された [Olcott 2012: 119]。

V. 半亡命生活 (1993–2000) の中での交流と思索

1. 著述活動と知的権威たちとの交流³⁸⁾

ムハンマド＝サーディクは1993年1月、シリアとリビアの知人の助力により、リビアでの居住許可を得た [Olcott 2012: 119]。彼の住まいは、1970年後半に留学生活を送った第2の故郷トリポリ、具体的には世界イスラーム・ダアワ協会本部の周辺にあてがわれた。カッザーフィーの庇護の下、彼は何不自由な生活を保障された。ただし、彼は2000年までの間に、サウジアラビアのマッカとトルコのイスタンブールにも一定期間居住した。妻ファーティマハンと長男イスマーイールハン (Ismoilxon, 1976–), 長女アディーナハン (Odinaxon, 1980–), 次女アーミナハン (Ominaxon) との同居生活も外国で再開された。なお、長男と長女は共にイスラーム・ダアワ学部で学んだ。

ムハンマド＝サーディクは、約7年間の半亡命生活の多くを読書と著述活動に費やしたとされる [Olcott 2012: 120]。彼が掲げた目標は、良質な宗教書により国内のムスリムをイスラームに回帰させることであった。帰国はいつか、ウズベク語の論攷のウズベキスタンへの持ち込みは可能かといった不安の中でも、彼は「……故郷と民衆、親戚、父母から引き離されて生きることは、預言者ムハンマ

38) 以下、この節について特に言及しない限り、[MYMA 2016: 88–95, 125–127] を参照した。

ド——彼に祝福と平安あれ——からわたしたちに残された遺産になった。このことにも感謝しなくてはならない」と一切の不満を口にすることなく、新天地でも仕事に取り組んだ。

ムハンマド＝サーディクは1991年にダシュケントで刊行した『新月の解釈書』(*Tafsiri Hilol*)の続編の一部をこの時期に外国で上梓した。そこで彼は「中庸の意味」を何度も強調した、と自ら述べている [MYSMS 2016: 5]。この書は現在ウズベク語の啓典解釈書の最高傑作とされる [アブドゥルマジード 2019: 41–42, 48]。ただし、彼は誰にも読まれない可能性のあるウズベク語での著述活動に不安を感じ、イスラーム世界の知的権威たちに時に意見を求めていた、と弟ムハンマド＝アミンは語る [MYMA 2016: 91]。

かの方 [兄ムハンマド＝サーディク] はさまざまな国際会議に参加し、イスラーム学者や国の要人らと会合で同席し、互いの経験を交換していた。そのさい、多くの人々が「あなたはアラビア語でも著述活動を行える」と意見を述べたらしい。かの方は傑出したイスラーム学者たる [インド出身の] アブル・ハサン・ナドウィー [Abul Hasan Ali Hasani Nadwi, 1914–1999], ユースフ・カラダーウィー, ムハンマド・アリー・サーブーニー, ラマダーン・ブーティーなど幾人かの親愛なる方々に相談したそうである。彼らは「わたしたちはあなたの偉大な先祖たち、イマーム・ブハーリーやイマーム・ティルミズィーらが著した書を読み、宗教を学んだ。わたしたちはアラビア語で十分に著述活動を行っている。あなたは自分の母語で書きなさい。わたしたちはあなたの母語で何も書けないから」と助言をしたという。この助言はさらなる熱意と共に仕事 [ウズベク語での著述活動] を継続する刺激となった。

こうして、ムハンマド＝サーディクは半亡

命生活期に、彼の生涯における全著作の約6割にあたる約30の論攷と約25冊の書籍・小冊子をウズベク語で著した [Olcott 2012: 120]。

彼はE・サイードによる『オリエンタリズム』のアラビア語訳書を読み、その内容に全面的に賛同していたことでも知られる [Olcott 2012: 132–133]。イスラームとテロリズムを結びつける西欧メディアの印象操作により世界が謀られている、と自らも感じていたからに違いない。ただし、これを看過できないとしたイスラーム学者たちが問題解決に取り組みはじめた一方、「テロリズム」とされる武力行使を行うムスリムが後を絶たないことも事実である、とムハンマド＝サーディクは述べる [MYSMS 2016: 6]。そして彼は、その主因の1つとして中道主義の軽視を指適する [MYSMS 2016: 7]。

このことをムハンマド＝サーディク自身、カッターフィーとチャドを訪問したさいに実感したという。約2,000人の聴衆を前にクルアーンを朗読した彼は、説教を行う機会にも恵まれたようである。そこでの説教の内容と後の聴衆の反応について、彼は以下のように記している [MYSMS 2016: 7–8]。

時折、わたしたちは大勢の人々に語りかけてみるよう努めた。チャドで催された大きな学術会議で演壇に立ち、その時までには起き、[いまも] 起こっている武装闘争がムスリムにどのような利益があるのかということについて感情をこめて語った……「何のためにムスリムの血が流されているのか?」……「何のためにムスリムは亡命を余儀なくされているのか?」、「なぜムスリムは過ちを再び繰り返すのか?」といった質問を群衆に投げかけた。[これに] 答えた者は誰もいなかった。休憩になると多くの人々がやって来て、「あなたの問いに答えを見つけるのは難しい……」と話した。この問題で最も重要な答えの1つはイス

ラームにおける中道主義、つまり中庸の概念が十分に行き届いていないことだ、と述べた者は誰もいなかった。

ムハンマド＝サーディクが中道主義に傾倒していく過程で、クウェートのイスラーム学者らとの交流は重要である。彼らも中道主義の不十分な普及がムスリムによる「テロリズム」を再生産している、と考えていたからである。以下、彼自身による記述を見よう [MYSMS 2016: 8-9]。

[わたしは] クウェート人のムスリム同胞たちとこの問題について、よく話し合っていた。どういう訳か、彼らは武力行使ではなく知的営為を重視し、流血や人々の衝突、厳格主義といったものに反対していた。「いまの状況が長く続いてはならない。誰かが現状に異を唱えなくてはならない」と〔彼らは〕言っていた。最終的には『予防の法学』[*al-Fiqh al-wiqā'i*] という綱領が案出された。そこでは武力行使や武装蜂起、衝突といったさまざまな現象を事前に防ぐために実施する必要のある事柄が記されていた。上記の草案は一部の人々に配布もされた。そこでは、ある学術会議の開催についての議論がなされていた。その計画によれば、その会議に参加する予定の大学者らによって引き起こされている武装闘争、「ジハード」、これと関連する事柄のシャリーアにおける根拠の有無を確認する必要があるとされた。

こうした交流と活動をとおして、アラブ・アフリカのイスラーム世界でのムハンマド＝サーディクの地位は確立された。彼は1997年にサウジアラビアにおけるイスラーム世界

連盟の独立国家共同体 (CIS) 担当と運営評議会常任理事に選ばれた。またヨルダンのアール・バイト機構附属イスラーム思想学会と、リビアにおける世界イスラーム・ダアワ協会の理事などにも任命された。

一方、この頃にムハンマド＝サーディクが第一次チェチェン戦争 (1994.12-1996.8) でロシア軍とチェチェン独立派の和平プロセスに貢献したことはあまり知られていない。ロシア・チェチェン共和国の現首長ラマダーン・カディロフ (Ramazan Kadyrov, 1976-) の父にして、チェチェン独立派の精神的指導者であったアフマト・ハッジ・カディロフ (Axmat xozhi Kodyrov, 1944-2004) は、ムハンマド＝サーディクの教え子であった。彼は1980年代に、ブハラのみーリ・アラブ・マドラサ (1980-1982) と、タシュケント・イスラーム高等学院 (1982-1986) で学んだ。モスクワに本部を置く「ワサティーヤー中道」学術・啓蒙センター³⁹⁾の所長アリー・ポロシン (Ali Polosin, 1956-) は、「中道主義は進取の気性の1つである」と題された論攷で「彼 [ムハンマド＝サーディク] は自身の弟子アフマト・ハッジ・カディロフに、この件 [第一次チェチェン戦争の和平プロセス] で最も正しい道 [中道主義] を示した」と記している [Polosin 2018: 239]。

2. タジキスタン内戦をめぐる内省

ムハンマド＝サーディクは約7年間の半亡命生活の中で、彼が宗務局のムフティー職にあった1992年に開始されたタジキスタン内戦を常に気にかけて、自らの過去を内省していたとされる [Olcott 2012: 121]。この内戦でエモマリ・ラフモノフ (Emomali Rakhmonov, 1952-, 現大統領) 政権と戦ったタジク反対派連合を率いた人々の中には、

39) この組織は、2006年にクウェートで創設された中道主義国際センターのロシア支部であり、2010年にロシアで登録がなされた後、2011年にクウェート国王によってその設立が承認された [Melkumian 2018: 96]。なお、所長のポロシンはムハンマド＝サーディクによる著作『中道主義』などのロシア語訳書の編者でもある。

前述したヌーリーやヒンマトザーダなど、ヒンドゥスターニーと決別した教え子たちがいた。この内戦は1997年まで続き、約6万人の死者を出したと言われる〔帯谷 2004: 121; Akiner 2001: 44〕。当時のタジキスタンの人口が約550-590万人⁴⁰⁾であったことから、約100人に1人がこの内戦で死亡したことになる。

ムハンマド＝サーディクは、タジキスタン・ムスリム宗務局の大カーディーであった盟友アクバル・トゥラジャーンザーダ (Hoji Akbar Tūrajonzoda, 1954-) の信奉者たちが政権軍から攻撃を受けたことにより、それへの反撃がイスラームの防衛のために容認されるとした⁴¹⁾。ウズベキスタンの大半のイスラーム学者は、タジク反対派連合を構成したタジキスタン・イスラーム復興党を支持し、同党による政権軍への防衛ジハードを容認した。ムハンマド＝サーディクは、タジキスタン・イスラーム復興党などへの支援活動を組織したナマンガンのウマルハンをとおして、経済的・物質的支援を行ったともされる。タジキスタンでのイスラーム主義者の勝利がウズベキスタンに先例として機能し、政権とイスラーム主義者の間で権力の再調整をもたらす、と考えていたからである。この内戦には、アブドゥワリーの信奉者やウズベキスタン・イスラーム運動も参加した。

内戦の開始後、ウズベキスタンの政権はタジキスタンとの国境を閉鎖し、国内の急進的

なイスラーム主義者を次々と排除していった。1995年8月29日、モスクワでの国際会議に向かっていてアブドゥワリーがタシュケントの国際空港で行方不明になった〔Frank and Mamatov 2006: 2〕。1999年2月16日のタシュケント連続爆破事件では、「テロ」発生の直後にヨルダシェフと世俗主義政党エルク (自由) の党首ムハンマド・サーリフ (Muhammad Solih, 1949-) が首謀者として名指しされた⁴²⁾。そのさい、行方不明中のアブドゥワリーの弟子ら数百名も逮捕された⁴³⁾。

ムハンマド＝サーディクはタジキスタン内戦をとおして、一時の感情にまかせた極端な行動が政権との流血の衝突とムスリム社会の自壊をもたらすことを再認識した〔Olcott 2007b: 5〕。こうして、彼は自らの過去を内省し、この内戦で敗れたイスラーム主義者たちにジハードを控えるよう進言しなかったことを過ちであった、と結論づけたに違いない〔Olcott 2012: 121〕。この心境の変化は、半亡命生活の終わり頃におけるムハンマド＝サーディクのジハード論に明確に認められる。

3. ジハード論と中道主義

ここで2019年3月12日にYouTubeに投稿されたムハンマド＝サーディクによる説教「ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフ ジハードに関する質疑」(ウズベク語)を取り上げよう⁴⁴⁾。この説教は、ソ連軍のアフガニスタン侵攻(1979年)から20

40) ここでの人口の推移について、国連統計 (<https://unstats.un.org/home/> [2020年9月18日閲覧]) を参照した。

41) この段落について、〔Olcott 2007a: 49, 51, 69〕を参照した。

42) BBC Uzbek が2018年2月20日にYouTubeに投稿した音声データ「国家保安庁はタシュケントでの爆発を事前に知っていたのか?」(<https://www.youtube.com/watch?v=R69pumQ34sg> [2020年9月20日閲覧]) を参照した。このデータは、この事件の目撃者にして、ウズベキスタン・イスラーム運動の広報官であったとされる男性に2003年に実施されたインタビューである。なお、ムハンマド・サーリフは現在トルコに居住している。

43) エルク党の中心人物の1人にして、1998年頃にアメリカに亡命したジャハーンギール・ムハンマド (Jahongir Muhammad, 1958-) が2020年2月15日にYouTubeに投稿した動画「第214回1999年2月16日犯罪の黒幕」(<https://www.youtube.com/watch?v=8HW2JnmvRLg> [2020年9月20日閲覧]) を参照した。

44) <https://www.youtube.com/watch?v=fhLoMBkU2cU> (2020年9月21日閲覧)。

年、またインドからのパキスタンの分離独立（1947年）から52年が経つとの発言が説教中にあることから、1999年になされたものだと考えられる（場所は不明）。そこでは、植民地主義時代の到来と共に、世俗主義的な国民国家体制下で宗教を忘れた現代 musulim のためのジハード論が説かれている。

このジハード論には、中道主義を牽引するカラダーウィーによる現代的なイスラーム法解釈の影響がよく見て取れる。彼はまず、メディアでのジハードをめぐる見方には、「ジハード＝非ムスリムの殺戮」としてムスリムに負のイメージを付そうとするイスラームの敵対者の見方と、「ジハード＝敵の攻撃からの防衛」としてムスリム一般の身の潔白を証明しようとするイスラームの擁護者の見方の2つが存在する、と指摘する。そして真実はどちらの側にあるのか、と問う。

次にムハンマド＝サーディクは、そのどちらの側にも真実はないと述べたうえで、サラフ時代のムジャーヒド（*mujāhid*: ジハードを行う者）に注目し、とりわけラビーア（Rabī'a）という名のサハーバの発言を典拠としてジハードを定義する。サラフの時代からこそ、イスラームは世界に広まり、その文明が栄華をきわめたからである。以下に引用する伝承は、第2代カリフのウマル（‘Umar ibn al-Khaṭṭāb, 592–644）によってイラク征服を命じられた、サアド・イブン・アビー・ワッカース（Sa‘d ibn Abī Waqqāṣ, 600頃–670/78）を司令官とするムスリム軍が、ユーフラテス川中流でサーサーン朝ペルシア軍を撃破するカーディスィーヤの戦い（637年頃）の開始前を舞台とする。

サアド・イブン・アビー・ワッカース——彼に神の御満悦あれ——の指揮下にあった征服者たるサハーバらは、ペルシアの国〔サーサーン朝〕の国境付近に到着し、その地の川岸で陣を張り、ペルシア帝国へのジハードを準備していた。一方、ペルシア

軍の兵士らもルスタムという司令官の指揮下で〔そこへ〕到着し、川の対岸に陣を張った。ペルシア人らはムスリム側に使者を遣わせた。使者が到着し「司令官は誰だ？」と訊ねた。〔ムスリムたちは〕「われらの司令官はサアド・イブン・アビー・ワッカースだ」〔と答えた〕。「〔彼は〕どこにいる？宿営、いや本営はどこだ？」〔とペルシア軍の使者が訊ねると、ムスリムたちは〕「本営はない。〔サアド司令官は〕人々〔兵士たち〕と一緒にいる」〔と答えた〕。〔これに驚いたペルシア軍の使者は〕「〔司令官たる者が〕なぜ人々と一緒にいるのか？」〔と訊き直した〕。〔ムスリムたちは〕「〔彼も〕同じ人間だ。人々と一緒にいる」〔と答えた〕……〔ペルシア軍の使者が〕ある場所に行くと、サアド・イブン・アビー・ワッカースは5–6人で座り、話をしていった。〔ペルシア軍の使者は彼の前に〕行き……「われらの司令官はあなた方の目的を知るために〔ムスリム軍の司令官の〕御前に使者を遣わされた……〔あなた方のうちの〕誰か1人に〔ペルシア側に〕来てもらい、訊ね事をする。〔ルスタム司令官は〕目的を知りたがっている」と述べた。サアド・イブン・アビー・ワッカースが後ろを向くと、ラビーアというサハーバが寝転がっていた。「立て、お前が行け」と言うと、彼——彼に神の御満悦あれ——は立つやいなや、槍にもたれかかって馬に跳び乗った……〔ペルシア軍の使者は〕この人物を連れて立ち去った。川を渡って進み、〔ルスタム〕司令官が座す本営に近づくと、〔ペルシア軍の〕使者たちは路上で下馬し、お辞儀をして〔本営内に〕入って行った。〔一方〕彼〔ラビーア〕——彼に神の御満悦あれ——は馬に乗った状態で前に進む。〔本営の〕扉〔の前〕に着くと、〔ペルシア軍の〕大勢の者が走って来て、〔ラビーアを馬から〕引きずり降ろした。〔ラビーアが〕「何だ!？」と言うと、〔彼らは〕「主の前に馬

に乗って行ってはならない」〔と注意した〕
 …… 通路には虎の毛皮が敷かれている。
 [ラビーアは] 歩を進め、司令官の横に座った。すると [ペルシア軍の者たちが] また走ってやって来て、[彼を] 下に降ろし、「司令官の横に座ってはならない」〔と注意した〕。[ラビーアが]「では、どうしたらいいのだ？」と訊くと、「彼 [ルスタム司令官] に正対して座らなければならない」〔と彼らは指示した〕。「いや、そんなことはしない」〔とラビーアが拒むと、ペルシア軍の兵士の1人が]「どうした？」〔と声をかけた〕。[ラビーアが]「あなた方の帝国、ペルシア文化、公正さについて、さまざまな伝説がわたしたちのもとに伝わって来ていた。[それらを] 聞き、わたしたちは憧れていた。しかし、自分自身と変わらない人間に対し、これほどへりくだる民に、決して勝利は訪れない。わたしたちと『戦う』と言うなかれ。最終的に、あなた方は戦いで敗れる」と [ラビーアが] 言うと、[ペルシア軍の兵士は]「わかった。その話は明日にするとして、いまは司令官と話せ」〔と答え〕、通訳を呼んだ。通訳が来ると、主 [ペルシア軍のルスタム司令官] は「なぜお前たちは [国境まで] やって来たのだ？ 目的は何だ？」と訊ねた。そのさいに [ラビーア] —— 彼に神の御満悦あれ —— はジハードの目的を述べた。「至高なるアッラーは奴僕が奴僕に服従するのではなく奴僕の主 [神] に服従し、諸宗教による束縛 [抑圧] ではなくイスラームの公正さに、現世の狭さではなく来世の広さに [奴僕を] 至らしめるために、わたしたちを [この世に] 遣わし給うた」。この言葉が真のジハードの定義になった。すなわち …… ジハードとは [不信仰者を] 見つけ次第「お前はイスラムではない」と [彼らの] 頭を剣で討つことではなく、現世の狭さを忘れ、来世の広さを願って暮らす人々の地平を広げるダ'awat: 呼びかけ・

宣教] である。ジハードは「[イスラームの] 擁護者」と自認する一部の人々が言うように、[敵が] 攻撃をして来たさいに [だけ] なされるものではない。ジハードとは、自らが体験した善き事と神の恩寵を他者に伝えようとする奮闘である。

ムハンマド=サーディクは続けて、現代においてジハードを遂行した後のイスラム社会の自壊について言及し、その根本原因をイスラムの宗教的な無知に求める。ジハードにより、たとえばアフガニスタンではソ連軍、またソマリアではアメリカ軍を撤退させた。しかし、その後にムジャーヒド同士が殺し合い、これらの地域では内戦が続いている。ムハンマド=サーディクは、とりわけ第一次チェチェン戦争を取り上げ、チェチェン独立を認めないロシアの軍隊をチェチェン人がジハードにより撤退させた後のチェチェン・イスラム社会での内紛について以下のように語る。

チェチェンは全世界を驚嘆させた。これほどの大国 [ロシア] を消耗させた。一度の蜂起で [ロシア軍を] 撤退させた。[しかし] 撤退させると、[チェチェンのイスラム社会で] 互い [の首] の絞め合いがはじまった。[1997年1月に欧州安全保障協力機構の監視下で] 選挙が実施され、マスハドフ [Aslan Maskhadov, 1951-2005] が大統領 [在任期間 1997-2005] になった。[すると] 落選した者たち、[すなわち] 「7本の槍」が彼に敵対した。その筆頭に [野戦司令官] シャミール・バサーエフ [Shamil Basayev, 1965-2006] [がいた]。「マスハドフは不信仰者 [qofir] だ。政権を神の書 [クルアーン] によって運営していない。[それゆえ、彼を] 殺さなければならない」〔とバサーエフは言った〕。「待て。[神の書による政権運営は] そもそも1日にして成らない。ぜひ一緒に [政権運営を] 行おう。和解しよう」と [周囲の者がバサー

エフに]言う。[その後、実際にマスハードフ大統領は彼に]「お前が首相だ」と述べた。[バサーエフは1998年1月から]9ヶ月間、首相になった。[しかし]9ヶ月後に退任すると、「あいつ [マスハードフ大統領] は不信仰者だ」[と再び言いはじめた] 彼 [バサーエフ] はマスハードフを裁判所に訴えた 裁判官たちは顎鬚がようやく生えはじめた15-16歳の若者 [であった] ムフティー [ファトワーを出す法学者。裁判でのカーディーの顧問] は「同胞たちよ、質問が2つ、お願いが1つある」と言った。「よく聴いてくれ。第1の質問——われわれ自身はどのような政権下にいるのか？ 第2の質問——この法廷 [mahkama]、裁判所はシャリーアに則って運営されるのか、否か？」と仰せられた。[そこに居た人々は]「イスラーム政権だ。わたしたちはイスラーム共和国と宣言し、いまシャリーア最高法廷 [oliy shar'iy mahkama] にいる。シャリーアに則って判決が下る」[と答えた⁴⁵⁾]。彼 [ムフティー] は「わかった。われわれがイスラーム政権であり、[ここが] シャリーア法廷であるなら、シャリーアの規定、[すなわち] 法廷の判決を受け入れなければならない。裁判長が有罪とする場合、われわれ全員で刑罰を下そう。しかし、有罪とならない場合、原告は告訴を棄却し、われわれ全員沈黙しよう。これがお願いだ。では、裁判を開始してくれ」と言った [最終的な裁判長の] 判決はマスハードフを無罪とした しかし、バサーエフは立ち上がり、「俺は彼 [マスハードフ大統領] を排除する方法を必ず見つける」[と言った]。これは一体、何だ!?! こうしてチェチェンという国家の中で、約2,000-3,000名の人々が [別の] 国家を形成している

..... その頃に「ダゲスタンに攻撃をしかけよう」と [バサーエフらは] 言っていた 「いや、やめておけ。それは駄目だ」とわたしは言ったが、[彼らは]「200名が集まった」[と答えた]。[1999年8月にロシア・ダゲスタン共和国に] 侵攻し、いま全国民が破滅した すなわち、これらのこと [の善悪] を識別するのなら、[これらは] 正しくないことである。[これらが] 正しくないこと [の根拠] はどこにあるのか？ [それは] アフガニスタンとチェチェンでジハードを行った大半の人々にも、ソマリアやボスニアなどでも、ジハードの名は知られていて、ジハードは行われるが、[ムスリムたち自身が] イスラームに精通していないことにある ジハードとは、イスラームの統治に到達するための手段、方法、道具、要因であり、目的ではない。[現代におけるムスリムの] 目的は、イスラーム国家を建設して [そこで] 暮らすことにある 機関銃だけで国家は建設されない。知識や経済、政治が必要である。経済の発展には、医療など多くの分野が必要である。彼ら [昨今のムジャーヒドたち] は、こうしたことを考えていない。[彼らには] 知識がない。現在のムジャーヒドたち、彼らの中で指揮官となった者たちは良い青年たちだ。素晴らしい人々だ。勇敢で恐れを知らない善良な人々だ。しかし、足りないものはそれ [知識] だ。

ただし、ムハンマド＝サーディクは、現代におけるジハード遂行後のムスリム社会の自壊について、ムジャーヒドだけでなく、シャリーアによる統治を一切実現しようとしないうムスリム諸国の世俗主義政権にも非があると説く。そのうえで、彼は両者の中間を行き、そのどちらにもくみしないムスリムの立場か

45) 1999年2月にマスハードフ大統領は議会を解散したうえで、「共和国に完全なシャリーア支配を導入し、国家評議会 (シェーラー) を設立する」という声明を出した [角田 2002: 23; Bobrovnikov 2002: 274]。

ら公共の利益と中道主義を判断基準として法解釈を行い、ジハードの遂行は古典イスラーム法学的に正しいが、現代においては許容されない、と結論づける。

ウラマーたちはなぜ沈黙しているのか？
 ……「ジハードを行う」と公言している者たちの発言に真実があるからである。ジハードは存在するものである。「アッラーの統治が実現するように」という理念はある。彼らの敵対者はそれを実現していない…… イエメンで、あれ〔ジハード〕を行ったアブー・ハサン〔Abū al-Ḥasan〕は〔当局に〕捕まり、連れて来られた。裁判が行われている。〔彼は〕恐れることなく、平然としている。「何か発言したいことはあるか？」〔と問われ、彼は〕「われわれはこれを神の道において行っている。いまの政権が偽りの政権であり、アッラーの書とかけ離れた政権だからだ。そこでは、シャリーアは一切考慮されていない。すべてを西洋から持ち込まれたものに立脚して行っている。これにジハードを遂行しなくてはならない」と述べる。彼ら〔イエメンの政府関係者ら〕は「いや、われわれはアッラーの書に立脚して政権〔運営〕を行っている」とは言えない。〔彼らがそれを今後も〕行わないからである。〔世俗主義政権の〕決して変わることはない点はどこにある。それゆえ、わたしたちが理解すべきは、双方〔ムジャーヒドと世俗主義政権の両者〕に至らない点があるということである。その間に普通のムスリムがいるのだ……つまり、イスラームの道で何かを行いたい、と計画する者は事前に考える必要がある。その行動がわれわれの宗教の現状を改善するのか、否か。多くの人々が決意して「これを行えば、われわれの宗教の状況はいまよりも良くなる。このことはシャリーアにこれほどの益をもたらす」と断定できるのなら、〔それを〕行うように……〔イスラ

ムの現状を〕後退させ、害するのなら、善き事だとしても〔それを〕行わないように。無益な善き事より現状維持の方がいいからである。何かを「行う」ことにより〔イスラームの現状を〕悪化させることをダアワは許容しない。

この1999年の説教におけるムハンマド＝サーディクのジハード論は、その穏健性において前述したヒンドゥスターニーのそれと結果的に重なる。この思想的な穏健性こそウズベキスタン当局が後にムハンマド＝サーディクと協調するに至った主因の1つであろう。彼の家族は1999年、そして本人は2000年にウズベキスタンへの帰国を果たした〔MYMA 2016: 127〕。彼の国内復帰を助けたのは、またしても妻方のサッティーエフ家であったと言われる〔Olcott 2012: 109-110〕。

VI. 非党派主義と中道主義の萌芽

1. 帰国後（2000-2015）の国内外の状況

ウズベキスタンでは2000年までに、アブドゥワリーヤやヨルダシェフ、その信奉者たちが社会の表舞台や国内から姿を消し、その空白にカリフ制再興を掲げるイスラーム解放党が勢力を伸ばしていた。ウズベキスタン・イスラーム運動は、2000年前後からアフガニスタンなどで復権し、国際的・急進的なイスラーム主義運動と連動した。こうした動きに対抗すべく、政権はかつて検挙した一部のイスラーム主義者たちに恩赦を与えたのである〔Olcott 2007a: 52〕。この中に、国内復帰とタシュケント市内での説教を許されたムハンマド＝サーディクがいた〔Olcott 2007a: 52-53〕。

ウズベキスタンに帰国した後のムハンマド＝サーディクには、主にイスラーム解放党の勢力を抑えることが政権から期待された。当時の宗務局のムフティー（第3代）は、アンディジャン市出身のアブドゥラシー

ド・バフラーモフ (Abdurashid Bahramov, 1953–2011) (在任期間 1997–2006) であった。彼は 1993 年にムハンマド＝サーディクをムフティーの職から退かせた中心人物の 1 人であったとされる [Olcott 2012: 116]。バフラーモフは、約 9 年間におよんだ彼のムフティーとしての職歴からもわかるように、政治的能力に秀でた官僚型の宗教者であった [Olcott 2012: 119]。

ムハンマド＝サーディクは国内復帰のさい、公職への誘いも受けたが、策謀のうずまく世界から距離を置くべく、これを断り、在野の学者の道を選んだ [MYMA 2016: 128]。公職から身を引いた彼は、政権からの宗務局の自立という目標を弟子たちに託したと考えられる。一方、政権が彼の活動を黙認した理由は、国内のイスラム社会の分断、ならびに政権とイスラム民衆の対立を抑制し、またイスラム世界でのウズベキスタンの評判を保持するためであった [Olcott 2012: 108]。

ムハンマド＝サーディクは約 7 年間の半亡命生活の中で、急激な変化が成功をもたらさないことを学んでいた。それゆえ、帰国した彼は本稿の冒頭で述べたカラダーウィーの言う「現代社会をイスラムに導きうる先導的勢力」と「それを支持する民衆のイスラム的世論」を形成すべく、弟子の育成、説教、自著の刊行、それらの CD・DVD 化とデジタル化、出版社 (Hilol nashr など) の設立、インターネット環境下での多様なプラットフォーム (islom.uz など) 作りに励んでいく。

2. 非党派主義の普及の試み

2001 年の米国での同時多発テロ以来、欧米メディアによる「イスラム過激派による

テロ」報道は過熱し、そのことによりイスラム社会の分断はいっそう深まった。テロリズムへの非難がイスラム諸国でも活発になされるようになったからである。一方、欧米諸国の一部は、特定のイスラムの組織やイスラム諸国を非難し、反テロ闘争の名目でアフガニスタンやイラクなどで戦争を開始した。

こうしたなか、イスラムに平和と寛容性のイメージ付与し、世俗主義政権と協調関係を築きながら、国内の分裂したイスラム社会を統合するという課題をめぐる思索の中で、ムハンマド＝サーディクはラマダーン・ブーティーを精神的な師と仰ぐようになったと考えられる。世俗主義政権とイスラム民衆の間で舵を取る宗教的・政治的な立場、反ジハード主義⁴⁶⁾、そして非党派主義の思想が、両者の間で酷似していたからに違いない。ブーティーは元来シリアのイスラム同胞団の支持者であったが、後に同胞団の穏健派に理解を示す一方、武装闘争を説く中核とは決別し、世俗主義政権の宗教政策に貢献した人物であった [高尾 2019: 244–247]。ムハンマド＝サーディクのブーティーへの愛情は深く、彼の孫息子の 1 人はブーティーの名にちなみ、ムハンマド＝サイードと名づけられた。

ムハンマド＝サーディクはブーティーと知り合う以前から、彼の著作を読み、その文体の美しさと言葉遣い、シャリーアに即した問題解決の方法に魅了されていた⁴⁷⁾。彼らは 1980 年代半ば頃にアルジェリアのセティーフで催された学術会議「イスラム思想の集い」で知り合う⁴⁸⁾。その後、彼らはヨルダン・ハーシム王国アカデミーの理事になるなどの接点を持ち、スンナ派正統 4 法学派の規定から離反する急進的なイスラム主義者の問題

46) ムハンマド＝サーディクは、ジハード主義を批判したブーティーの著作『イスラムのジハード』(1993 年)の一部をウズベク語に翻訳し、前掲書『中道主義』の中で紹介している [MYSMS 2016: 273–275]。

47) 以下、この段落と次の段落について特に言及しない限り、[MYSMS 2018a: 3–8]を参照した。

48) この会議の開催年については、2013 年 3 月 23 日に YouTube に投稿されたムハンマド＝サーディクによる説教の動画「ムハンマド・サイード・ラマダーン・ブーティー博士について」(<https://www.youtube.com/watch?v=J4KO845aCXU> [2020 年 9 月 19 日閲覧])を参照した。

について語り合うようになった。

ブーティーは1995年に『サラフィー主義：イスラームに学派が存在しなかった祝福された時代』をシリアで刊行し、スンナ派正統4法学派から離反する急進的なイスラーム主義者を非難した。すると、その直後に『ムスリムは4法学派のいずれかへの帰属を余儀なくされるのか?』という著者不明の小冊子が流布された。そこでの主張を論駁するために、ブーティーは『非学派主義：シャリーアを脅かす最も危険な逸脱』を著した。しかし、この書はサイイド・ムハンマド・イード・アッパースィー(Sayyid Muḥammad ‘Īd ‘Abbāsī)による『盲目的に法学派に帰属することは逸脱である』において再批判の対象とされた。それゆえ、ブーティーはこの書への反論を加筆して、上記の第2版を2005年に刊行することになった、とムハンマド＝サーディクは一連の経緯を説明する。

こうして刊行された『非学派主義：シャリーアを脅かす最も危険な逸脱』(第2版)は、ムハンマド＝サーディクの提案でウズベク語に翻訳されることになった。このウズベク語訳は、まず彼自身が管轄したウェブサイト(islom.uz)に掲載され、次に2013年に書籍としてタシュケントで刊行された。2018年と2020年にも再版され、ムハンマド＝サーディクはこの訳書の「結語」でムスリム社会の分断の原因と団結の心得を以下のように記している[MYSMS 2018b: 198-206]。

..... このウズベク語訳書を読み 彼ら[急進的なイスラーム主義者]とわたしたち自身の間で起きた出来事と問題が以前にアラブの人々の間でも起きていたことを再確認した。こうした関心から、この問題についてのわたしの見解を以下に示す必要があると判断した。第1の見解は、スンナ派正統4法学派に追従する学者と無学者の平穏を破り、彼らを不安に陥れ、当惑させ、より重要な活動から[関心を]脇へそらさ

せている主因の1つが法学派に帰属しない者たちによる急襲と陰謀によるということである まさにこの真実をわたしたち自身も経験したし、いまもしている……第9の見解は、法学派に帰属しない者たちが引き起こしている対立がムスリム社会にとって諸悪の根源だということである スンナ派正統4法学派の道を護持する親愛なる人々に、さまざまな対立から距離をとり、反対者側の水準に下がり他人を不信仰者や不信心者[fosiq], 放埒な者[fojir]とすることは不適切だとみなすことを推奨する。

ムハンマド＝サーディクはブーティーの思想に学び、イスラームを政治的な運動と党に分割することに反対し、イスラームの知的・物理的な力を分散させる党派主義こそがムスリム社会の統合と回復を妨げている、と主張した[Olcott 2012: 132]。この観点から、イスラーム解放党はまさに「党」を形成していること自体が根本的な批判の対象となる。ムハンマド＝サーディクの非党派主義は、主にタジキスタン内戦をめぐる内省とブーティーの思想的影響をとおして、彼が以前から抱いていた党派主義の否定という立場を発展させたものとして理解されるべきである。なお、彼らの主張がスンナ派だけを対象にし、シーア派を捨象していることも重要な特徴である[Olcott 2012: 132; MYSMS 2018a, 2018b]。その他、ブーティーの説教にウズベク語訳を付した全27回の動画シリーズも2017年7月以来、彼の長女アディーナハンが管理するムスリム向けのウェブサイト(Muslimaat.uz)に掲載され、またYouTubeにも投稿されている(2020年9月1日閲覧)。

3. 中道主義の普及の試み

2000年代半ば頃のウズベキスタンのムスリム社会では、ゴルバチョフのペレストロイカ改革により形成された社会的・政治的な批判精神の風土と、ソ連解体によりもたらされ

た不可能が可能になるという幸福感はすでに失われていた。経済的貧困の拡大、イスラームの政治化を警戒する政権による過度な取締り、言論統制の徹底など、現地の社会を閉塞感が覆うようになっていた。

これらを背景に、ソ連解体前後には「臆病」と解釈されていた「中庸」の意義が人々の心に届きうる状況が生じていた。こうしたなか、ムハンマド＝サーディクは「イスラーム：中庸の宗教」と題した論攷を著して自著『信仰』(Iymon)に加え、第2版を刊行した。その後、その内容を斎戒月の礼拝のさいに語ったところ、翌日になってある知人が彼の家を訪ねて来たという [MYSMS 2016: 13]。この時の出来事をムハンマド＝サーディクは以下のように回想する [MYSMS 2016: 14]。

挨拶を終えると、[この] 客人は主な目的に移った。[彼は] モスクでの説教「イスラーム：中庸の宗教」について……いま求められているものが[まさに] これであること、このことに誰も注目して来なかったこと、説教自体が体を揺さぶるものであったことなど、ありったけの言葉を並べ立てた。同じ感想を抱いた人々と相談し、わたしが許可する場合、知人に頼み[その] 論攷を連載したいと語った。わたしは検討し、返答すると伝えた。しかし、この方がこの件で再び声をかけて来ることはなかった。「検討する」というわたしの言葉を拒否の返答と受け取ったに違いない。しかし、[この一件で]「イスラーム：中庸の宗教」という主題で[その内容を] 多くの人々に平易に伝えなくてはならないという思いが再び強まった。

この回想は、当時のウズベキスタンのイスラム社会で中道主義の思想がいかに大きな反響を呼んだのかをよく表している。さらに、中道主義の国内での普及というムハンマド＝サーディクの目標にとって大きな転機も到来する。前述したクウェートでの学術会議が2005年に「中道主義は人生の道である」との標題の下、ワクフ・イスラーム問題省の主催で開催されることになったからである。彼はその知らせが自身に届いたさいの心境を以下のように語る [MYSMS 2016: 14-15]。

「すべてのことに時宜はある」とはよく言ったように、「イスラームは中庸の宗教である」という考えを実現する時が予想外にやって来た。クウェートのワクフ・イスラーム問題省から学術会議への参加に関する招待状が届いたのである。招待状に添えられていた案内から、学術会議は「中道主義は人生の道である」という標題で催されるとの文面が目飛び込んで来た……クウェート人の多くは「中道主義に近い民である」と言って間違いではない。彼らの大半がこの考えを持ち、実践さえしている……それゆえ、「中道主義は人生の道である」という標題がまさにクウェートから出て来たことは、筆者にとって待望の出来事であった。

この会議の終了後、ムハンマド＝サーディクは主催者側の1人に、今後ウズベキスタンのイスラム民衆にイスラームが中道主義の宗教であることを伝えるため、本を執筆する可能性がある、と述べた [MYSMS 2016: 16]。ウズベク語による書籍『中道主義：人生の道』は、こうして著されたのである⁴⁹⁾。なお、

49) ムハンマド＝サーディクは、ヨルダン・ハーシム王国で宣言された「アンマン・メッセージ」(Risāla Ammān) に中道主義の思想が内包されていることに注目し、これを高く評価している [MYSMS 2016: 272]。アンマン・メッセージとは「2004年11月9日、ヨルダンの首都アンマンにて、現国王アブドゥッラー2世の名において宣言された……アンマン・メッセージの主張は……クルアーンの引用に基づき、過激主義・テロリズムや、イスラモフォビアの高まりといった現状に対し、穏健スンナ派の立場を積極的に示している」とされる [池端 2017: 43-44]。

彼が管轄していたウェブサイト (islom.uz) の運営資金の一部は、在ウズベキスタン・クウェート大使館とサウジアラビアからの援助によるとされる [Olcott 2012: 123]。

ムハンマド＝サーディクは上記の書で、カラダーウィーや反サラフィー主義的な思想の持主として知られるアズハル学院の古参アフマド・ウマル・ハーシム (Aḥmad ‘Umar Hāshim), クウェート出身のイスラーム学者アフマド・フサイン・アフマド・ムハンマド (Aḥmad Ḥusayn Aḥmad Muḥammad), シリア出身の現代を代表するイスラーム学者ワフバ・ズハイリー (Wahba al-Zuhayli, 1932–2015) などの見解を紹介することにより、中道主義を定義している [MYSMS 2016: 18–21]。ムハンマド＝サーディクにとっての中道主義をよりよく理解するためには、この書の詳しい検討が必要だが、これは今後の課題である。

ムハンマド＝サーディクは亡くなる1年前の2014年に「イスラーム国」を非難する説教の中で、本稿の冒頭で述べたカラダーウィーによって創設されたムスリム・ウラマー世界連盟の声明を紹介した⁵⁰⁾。そのさい、彼は自らもこの連盟の理事でもあることを述べたうえで、この連盟による集団的イジュティハードこそ、個人レベルでの「イジュティハードの門が閉ざされた」現代を生きるムスリム同胞が従うべき最も権威ある見解の1つである、と語っている。彼は人生の最後まで中道主義の普及に尽力し、ウズベキスタンにイスラームの再興をもたらすための道筋を示し続けた。

VII. おわりに

ムハンマド＝サーディクの中道主義の原点

は、1950–1960年代の幼少期における父母からの宗教的な躾と教育、ならびに1970年代のタシュケント・イスラーム高等学院での講義にあった。それは1977年に社会主義国となるリビアでの留学期にさらに育まれた。この留学を契機として、アラブ・イスラーム世界の知的権威たちとの人脈が形成されはじめた。留学後の宗務局での通訳業とムフティー職の経験も彼の人脈づくりに役立った。1993–2000年のリビアを中心とした半亡命生活では、カッザーフィーと教育大臣アフマド・シャリーフの助力のもと、アラブ・アフリカのイスラーム世界での地位と信用を確立させた。1980年前後から顕著になるイスラーム世界でのジハードの遂行とその後のムスリム社会の自壊、1992–1997年のタジキスタン内戦は、ブーティーが唱導したイスラームにおける非党派主義、そしてカラダーウィーらが国際的に広めた中道主義の重要性をムハンマド＝サーディクに再確認させた。1999年の彼によるジハードについての説教を分析した結果、彼がこの頃にはすでに中道主義の思想を確立させていたことを明らかにした。

2000年にウズベキスタンに帰国した後のムハンマド＝サーディクは、いわゆる「官製学者」の道を拒否する一方、政権と良好な関係を維持しながら、社会におけるイスラームの指導権を回復するための戦略として、スンナ派イスラームの知の普及にすべてを捧げた。ムハンマド＝サーディクの思想は、ハナフィー伝統派の思想と急進的なイスラーム主義思想の間を行くものであった。彼にとって前者は、タクリードの伝統に固執して現代性を欠くがゆえ、社会におけるイスラームの指導権を回復するものではなかった。一方、後者はこの地でハナフィー派が伝統的に許容

50) Islom Time Tvが2020年4月17日にYouTubeに投稿したムハンマド＝サーディクによる説教の動画「導師ムハンマドサーディク・ムハンマド＝ユースフ：『イラクとシャームのイスラーム国家』の過ち」(<https://www.youtube.com/watch?v=DkUZfqGQWns> [2020年2月20日閲覧])を参照した。

してきた慣行に極端に不寛容であり、また世俗主義政権に攻撃的に過ぎるものであった。ムハンマド＝サーディクは、国内のムスリム社会の統合という喫緊の課題と対峙し、非党派主義とスンナ派正統4法学派の護持によってムスリム社会の分断の阻止を訴え、また現代的で穏健なイスラーム法解釈の道、すなわち中道主義の唱導によるイスラーム世界の再興を図った。

ハナフィー革新派の学者にして穏健なイスラーム主義者であったムハンマド＝サーディクの思想は、現代イスラーム世界の知的権威たちの中で、ブーティやカラダーウィーなど、ムスリム同胞団の穏健派と親和性のある、ないしは穏健派の系譜に位置づけられる可能性が高い。この思想潮流こそが、体制と民衆（すべてではないにせよ）の双方から絶大な信頼と支持を受けている現代ウズベキスタンのイスラーム潮流の本流だと考えられる。また、中道主義が普及している国家としてムハンマド＝サーディクがクウェートを絶賛していたことも、注目に値する。

参考文献

●日本語●

- アブドゥルマジード、ハサンハン・ヤフヤー（木村暁、和崎聖日編訳・注釈、和崎聖日序文）
2019「ウズベク語におけるクルアーンの解釈と翻訳について」『日本中央アジア学会報』15：23-52。
- 池端路子 2017「現代中東における宗派対立とヨルダンの宗派と合戦略：アンマン・メッセジの解析を中心として」『日本中東学会年報』33(1)：39-69。
- 磯貝健一 2009「イスラーム法とベルシア語——前近代西トルキスタンの法曹界」森本一夫編『ベルシア語が結んだ世界——もう一つのユーラシア史』（北海道大学スラブ研究センタースラブ・ユーラシア叢書7）、97-128、北海道大学出版会。
- 井筒俊彦 1957『コーラン』上、岩波書店。
- 大塚和夫、小杉泰、小松久男、東長靖、羽田正、山内昌之編 2002『岩波イスラーム辞典』岩波書店。
- 帯谷知可 2004「宗教と政治——イスラーム復興

と世俗主義の調和を求めて」岩崎一郎、宇山智彦、小松久男編著『現代中央アジア論——変貌する政治・経済の深層』、103-128、日本評論社。

- 川本正知、河原弥生、和崎聖日 2016「フェルガナ盆地のムジャッディディーヤ——ムジャッディディーヤ科 研 究 ウズベキスタ ン 調 査 報 告——」『日本中央アジア学会報』12：48-58。
- 黒田彩加 2019『イスラーム中道派の構想力——現代エジプトの社会・政治変動のなかで』ナカニシヤ出版。
- 小杉泰 1993「シリアのムスリム同胞団とサイド・ハウワー——ある思想家の軌跡」『国際大学中東研究所紀要』7：47-67。
- 2006『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会。
- 小松久男 1986「アンディジャン蜂起とイシャー」『東洋史研究』44(4)：589-619。
- 1994「中央アジアの変動とイスラーム復興」『国際問題』411：44-55。
- 2014『激動の中のイスラーム——中央アジア近現代史』（イスラームを知る18）山川出版社。
- 小松久男、梅村坦、宇山智彦、帯谷知可、堀川徹編 2005『中央ユーラシアを知る事典』平凡社。
- 塩崎悠輝 2012「カラダーウィーによる欧米のマイノリティ・ムスリムのためのファトワー——サラフィー的方法論とワサティーヤ（中道）の概念に基づく現代諸問題への取り組み——」塩崎悠輝編『マイノリティ・ムスリムのイスラーム法学』、5-16、日本サウジアラビア協会。
- 末近浩太 2018『イスラーム主義——もう1つの近代を構想する』岩波新書。
- 高尾賢一郎 2019「シリアにおけるイスラーム主義の栄枯盛衰——『今世紀最大の人道危機』を遡る」高岡豊、溝渕正季編『「アラブの春」以後のイスラーム主義運動』、229-259、ミネルヴァ書房。
- 角田安正 2004「チェチェンをめぐるロシアと外部世界の関係」『ロシア・東欧研究』31：20-37。
- 中田考監訳 2014『日亜対訳クルアーン』作品社。
- 中西竜也 2011「中国におけるペルシア語文法学の成立」『イスラーム文化研究』99：129-150。
- ババジャノフ、バフティヤール 2003「ソ連解体後の中央アジア——再イスラーム化の波動」小松久男、小杉泰編『現代イスラーム思想と政治運動』（イスラーム地域研究叢書2）、167-193、東京大学出版会。
- 坂坂修司 2001『正体』朝日新聞社。

●ウズベク語・英語・ロシア語●

- Abdovakhitov, Abdujabar. 1993. "Islamic

- Revivalism in Uzbekistan.” *Russia’s Muslim Frontiers* (Dale F. Eickelman, ed.), 79–100, Bloomington: Indiana University Press.
- Akiner, Shirin. 2001. *Tajikistan: Disintegration or Reconciliation?* (Central Asian and Caucasian Prospects). London: The Royal Institute of International Affairs.
- Babadjanov, Baxtiyar and Muzaffar Kamilov. 2001. “Muhammadjan Hindustani (1882–1989) and the Beginning of the “Great Schism” among the Muslims of Uzbekistan.” *Islam in Politics in Russia and Central Asia (Early Eighteenth to Late Twentieth Centuries)* (S. A. Dudoignon and H. Komatsu, eds.), 195–219, London-New York-Bahrain: Kegan Paul.
- Bobrovnikov, Vladimir. 2002. *Musul’mane Severnogo Kavkaza: obychai, prava, nasilie*. Moskva: “Vostochnaia literature” RAN.
- . 2017. “«Islamskoe vozrozhdenie» v Dagestane: dvadtsat’ pyat’ let spustya.” *Islamology*, T.7, №1, 106–121.
- Frank, Allen J. and Jahangir Mamatov. 2006. *Uzbek Islamic Debates: Texts, Translations, and Commentary*. Springfield: Dunwoody Press.
- Ismoilov, Zokirjon. 2018. “Din qayg’usida o’tgan umr.” *Muhammadga sollalohu alayhi vasallam sodiq Muhammad Sodik: Fazilatli shayx Muhammad Sodik Muhammad Yusuf Rahimahulloh haqlarida zamondoshlarining xotiralari* (Ahmad Muhammad Tursun, tuzuvchi), 23–30, Toshkent: «HILOL-NASHR».
- Melkumian, Elena. 2018. “Vlast’ i islam v Kuveite: posle vzaimodeistviia.” *Vestnik RGGU. Seriya «Politologiya. Istoriia. Mezhdunarodnye otnosheniia. Zarubezhnoe regionovedenie. Vostokovedenie»*, №2, 92–104.
- MYMA [Muhammad Yusuf, Muhammad Amin]. 2016. *Islomga bag’ishlangan umr: Shayx Muhammad Sodik Muhammad Yusuf Rohimahulloh xotirasiga bag’ishlanadi*. Toshkent: «HILOL-NASHR».
- MYSMS [Muhammad Yusuf, Shayx Muhammad Sodik]. 2016. *Vasatiya - Hayot yo’li*. Toshkent: «HILOL-NASHR».
- . 2018a [2013]. “Kirish so’zi.” *Mazhabsizlik Islom shariatiga tahdid soluvchi eng xatarli bid’atdir* (Muhammad Said Ramazon Butiy, muallif. Shayx Muhammad Sodik Muhammad Yusuf, umumiy tahriri ostida), 3–8, Toshkent: «HILOL-NASHR».
- . 2018b [2013]. “Xotima.” *Mazhabsizlik Islom shariatiga tahdid soluvchi eng xatarli bid’atdir* (Muhammad Said Ramazon Butiy, muallif. Shayx Muhammad Sodik Muhammad Yusuf, umumiy tahriri ostida), 198–206, Toshkent: «HILOL-NASHR».
- Muminov, Ashirbek, Uygun Gafurov and Rinat Shigabdinov. 2010. “Islamic Education in Soviet and post-Soviet Uzbekistan.” *Islamic Education in the Soviet Union and its Successor States* (Michael Kemper, Raoul Motika and Stefan Reichmuth, eds.), 223–279, London and New York: Routledge.
- Olcott, Martha Brill. 2007a. *Roots of Radical Islam in Central Asia* (Carnegie Paper no. 77). Washington, D.C.: Carnegie Endowment for International Peace.
- . 2007b. *A Face of Islam: Muhammad-Sodik Muhammad-Yusuf* (Carnegie Paper no. 82). Washington, D.C.: Carnegie Endowment for International Peace.
- . 2012. *In the Whirlwind of Jihad*. Washington DC, Moscow, Beijing, Beirut and Brussels: Carnegie Endowment.
- Polosin, Ali Vyacheslav. 2018. “Vasatiya tashabbuslaridan biri.” *Muhammadga sollalohu alayhi vasallam sodiq Muhammad Sodik: Fazilatli shayx Muhammad Sodik Muhammad Yusuf Rahimahulloh haqlarida zamondoshlarining xotiralari* (Ahmad Muhammad Tursun, tuzuvchi), 239–240, Toshkent: «HILOL-NASHR».
- Qodirov, Zohidjon. 2018. “Hazrat bilan hamnafaslik.” *Muhammadga sollalohu alayhi vasallam sodiq Muhammad Sodik: Fazilatli shayx Muhammad Sodik Muhammad Yusuf Rahimahulloh haqlarida zamondoshlarining xotiralari* (Ahmad Muhammad Tursun, tuzuvchi), 12–22, Toshkent: «HILOL-NASHR».
- Tursun, Ahmad Muhammad [tuzuvchi]. 2018. *Muhammadga sollalohu alayhi vasallam sodiq Muhammad Sodik: Fazilatli shayx Muhammad Sodik Muhammad Yusuf Rahimahulloh haqlarida zamondoshlarining xotiralari*. Toshkent: «HILOL-NASHR».
- Yo’ldoshxo’jaev, Haydarxon va Iroda Qayumova. 2015. *O‘zbekiston ulamolari*. Toshkent: Movoraunnahr.